

受驗準備叢書

普通學研究會

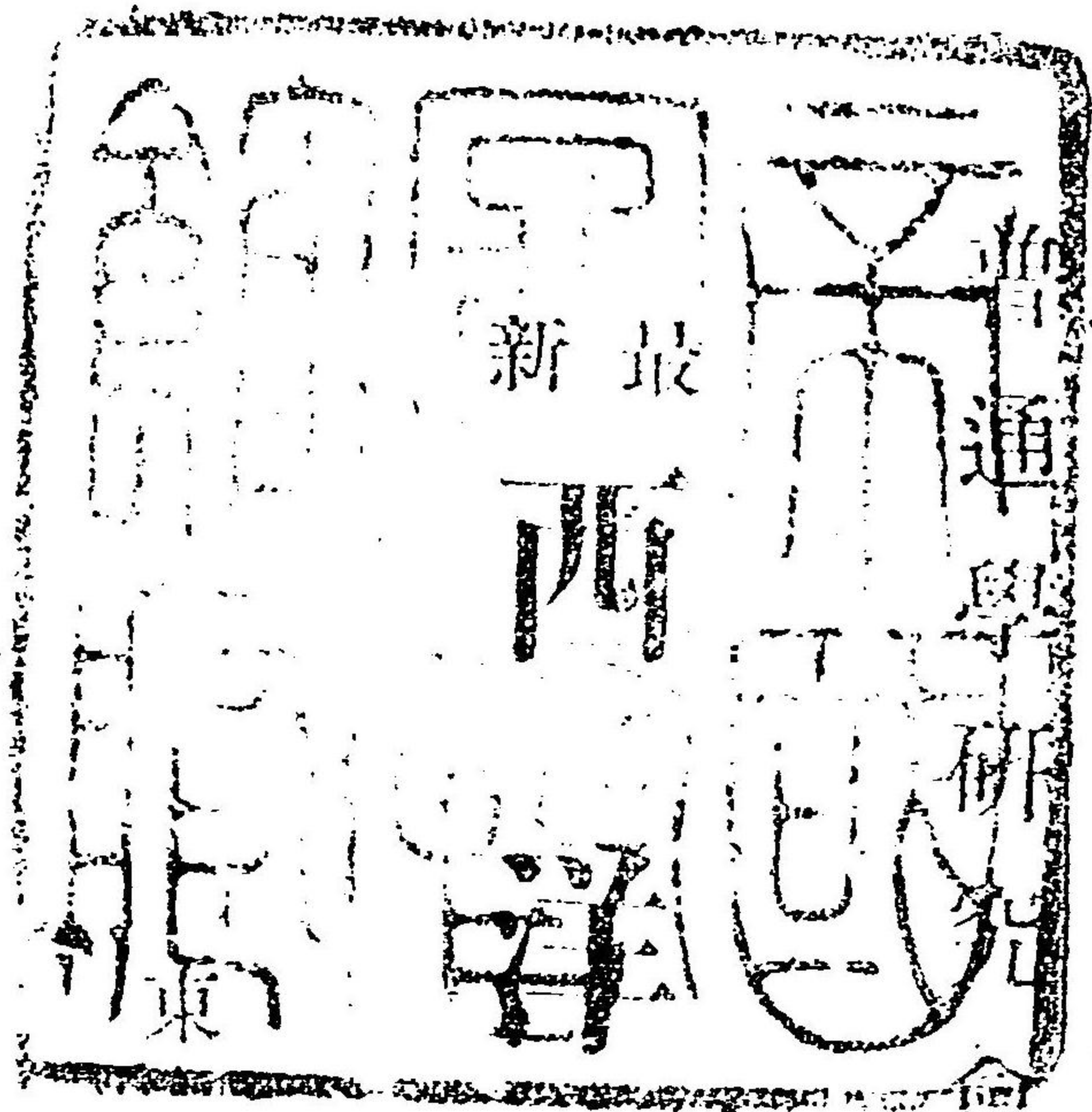
最新西洋歷史

後編

東京一書堂發行

261
190

受驗準備叢書



京

著

歷

史

後

一書堂發行



緒言

本書は前編に續きて之を繼承し、以て後編となしたるものなり。前編に於ては混沌時代なる上、中古史を叙述したれば、本編は更に進んで各國の統一確立時代たる近古、近世を一括し、添ゆるに十八、九世紀文明の進歩徑路を畧述し、以て現代に及びたるものなり。素より歐米十數箇國に涉る變遷と興亡を本書の如き一小冊子に收む、其の特に著はれたる要点を摘記したる、實に數の已むを得ざるもの、幸ひに諒恕あらんことを乞ふ。而して記述の體裁、主意は悉く之を前編に則り、載せて其緒言にあり、對照せられんことを冀ふ。

明治四十三年一月

於普通學研究會編輯部

擔當著者識

西洋歴史 後篇目次

第三編 近古史

第一章 宗教改革時代

一、イスパニアとフランス……………一

- 1 イタリヤの役 2 神聖同盟
- 3 ミラノ佛領となる

二、宗教改革……………三

- 1 原因 2 ルーテルの奮起 3 ルーテ
- ルの破門 4 ウォルムス國會
- 5 カロロ五世の勝利 6 新教の強勢
- 7 スバイエル國會 8 トルコの西侵
- 9 カルテン同盟 10 ヴレービーの和約
- 11 カルテンの役 12 カロロの讓位

三、ポルトガル、イスパニア

の殖民策……………九

- 1 葡人の東洋通商 2 イスパニア人
- の西漸 3 境界の設定 4 宣教師
- の活動 5 兩國殖民政策の失態

四、宗教改革の普及と反動……………一

- 1 新教各派の弘通 2 新教の弱點
- 3 セスイト團體

五、オランダの獨立……………一四

- 1 イスパニアの強大 2 ホーデル
- ランド 3 ユトレヒト同盟
- 4 英國の援助 5 獨立完成

六、イギリスの宗教改革……………一六

- 1 ヘンリ八世 2 王后離婚問題

- 3 イギリス教會
- 4 マリア女王
- 5 エリザベタ女王
- 6 文運隆盛

七、フランス宗派の争……………一九

- 1 ユグノー
- 2 ユグノーの役
- 3 セン
- 4 バルトロメオ祭
- 5 プルボン王朝
- 6 ヘンリ
- 四世の経綸

八、三十年戦役……………二二

- 1 原因
- 2 戦役
- 3 媾和條約
- 4 結果

第二章 強國勃興時代

九、オランダの隆盛と殖民策二六

- 1 イスパニアの衰微
- 2 オランダ
- 3 東方經綸
- 4 四方經營
- 5 殖民策

- 1 原因
- 2 戦況
- 3 結果

一四、北歐と東歐諸國の盛衰二八

- 1 スウェーデン
- 2 ポーランドの國情
- 3 プロシア王國

一五、ロシアの勃興……………四一

- 1 ロマノフ家
- 2 ペテロ大帝

一六、北歐の役とポーランド繼承の役……………四二

- 1 北歐の役
- 2 ポーランド繼承の役

一七、オーストリア繼承の役四四

- 1 プロシアの勃興
- 2 繼承の役の起因
- 3 第一回シレシアの役
- 4 第二回シレ
- シアの役
- 5 アーヘン和約

一八、七年の役……………四七

一〇、フランスの國家主義

確立……………二八

- 1 名宰相出づ
- 2 ルイス十四世
- 3 文藝美術

一一、フランスの外國侵略……………三〇

- 1 ネーデルランド入攻
- 2 オランダ侵入
- 3 フアルツ侵略

一二、イギリスの革命……………三一

- 1 スチュアート朝
- 2 長期議會
- 3 第一の革命
- 4 クロンウエル
- 5 王政復舊
- 6 ジェームス二世
- 7 第二革命
- 8 ウイルレム三世

一三、イスパニア王位繼承の役……………三六

- 1 原因
- 2 戦争
- 3 和約成る
- 4 結果

一九、英佛殖民策の衝突……………四九

- 1 イギリスの政策
- 2 フランスの政策
- 3 兩國の衝突

二〇、北アメリカ殖民地の獨立……………五〇

- 1 原因
- 2 獨立戦争
- 3 ベルサイユ條約

二一、北アメリカ合衆國の獨立……………五三

- 1 合衆國憲法
- 2 第一期議會
- 3 莫都

二二、ロシアの侵略……………五三

- 1 カタリナ二世
- 2 東方侵略

二三、ポーランドの滅亡……………五四

- 1 第一回分割
- 2 第二回分割
- 3 第三回分割

二四、十八世紀に於けるヨーロッパの情勢……………五六

- 1 情勢
- 2 風潮
- 3 政治
- 4 文物

第四編 近世史

第一章 革命時代

一、フランスの大革命……………六〇

- 1 革命の遠因
- 2 革命の近因

二、フランス革命の爆發……………六二

- 1 ルイ十六世王の幽閉
- 2 新憲法の發布
- 3 立法議會の成立
- 4 共和政治の成立
- 5 保安委員會
- 6 恐怖時代

16 ナポレオンの全盛

五、ヨーロッパ獨立の役……………七七

- 1 失勢の原因
- 2 イスバニア人起る
- 3 モスクバの大敗
- 4 ライプツヒの激戦
- 5 ナポレオンの王位と配流

六、ウィーン列國會議……………七九

- 1 ウィーン會議
- 2 ナポレオンの再舉
- 3 ナポレオンの末路
- 4 ウィーン會議の結果

第二章 各國統一時代

七、神聖同盟……………八二

- 1 神聖同盟の成立
- 2 メツテルニヒの自由主義抑壓政策

八、アメリカ諸邦の獨立……………八七

四

三、フランス革命の終末と

外國侵略……………六七

- 1 督政官政府の成立
- 2 外國侵略
- 3 統領政治

四、ナポレオン一世の霸業……………七一

- 1 オーストリア征討
- 2 アミアン和約
- 3 ナポレオンの内治
- 4 帝位に即く
- 5 對佛同盟の成立
- 6 トラファルガルの海戦
- 7 アウステルリツクの戦
- 8 ライン同盟成立
- 9 神聖ローマ帝國の滅亡
- 10 プロシア征伐
- 11 チルシツト條約
- 12 ロシアと默契
- 13 大陸條例の發布
- 14 ボルトガル及びイスバニア征伐
- 15 オーストリアの再征

- 1 獨立の動機
- 2 諸國の獨立

九、ギリシアの獨立……………九〇

- 1 ギリシアの反
- 2 獨立完成

一〇、七月革命……………九二

- 1 原因
- 2 革命の破裂

一一、七月革命の影響……………九三

- 1 ベルギーの獨立
- 2 ポーランドの叛亂
- 3 イタリアの動亂
- 4 スウイスの動搖
- 5 ドイツの動搖

一二、ドイツの關稅同盟と

イギリスの改革……………九五

- 1 ドイツの關稅同盟
- 2 イギリスの改革

一三、東方問題……………九六

五

一四、二月革命……………九九

- 1 起因
- 2 メヘメットの叛亂
- 1 原因
- 2 革命の破裂
- 3 共和政治の成立

一五、二月革命の影響……………一〇一

- 1 オーストリア
- 2 ドイツ
- 3 イタリア

一六、ナポレオン三世……………一〇二

- 1 フランスの第二共和政治
- 2 皇位に即く
- 3 其志望

一七、クリム战役……………一〇三

- 1 原因
- 2 英佛の聯合軍
- 3 セバストポルの包圍戦
- 4 バリー條約

一八、赤十字の起源……………一〇六

二二、シウレスウイヒ、ホルスタイン事件……………一一三

- 1 ヴイルレム一世の即位
- 2 ホルスタイン問題
- 3 デンマルク戦争
- 4 結果

二三、プロシア、オーストリア战役……………一一四

- 1 原因
- 2 战役
- 3 プラーゲ條約

二四、プロシア、フランス战役……………一一六

- 1 ナポレオン三世の外交失敗
- 2 ルクゼンブルク問題
- 3 イスバニア王位繼承問題
- 4 兩國軍の部署
- 5 セダンの戦
- 6 バリー開城
- 7 フランクフルト條約

一九、イタリア統一……………一〇六

- 1 統一の機運とエマヌエル
- 2 ナポレオン三世
- 3 サルデニアの開戦
- 4 チウーリヒ條約
- 5 イタリア王國
- 6 統一の完成

二〇、北アメリカ合衆國と其南北戦争……………一〇九

- 1 版圖の膨張
- 2 メキシコ战役
- 3 南北战役の原因
- 4 南北战役
- 5 結果

二一、メキシコ、フランスの交渉……………一一二

- 1 メキシコ事件
- 2 ナポレオン三世の野心

二五、ドイツ帝國とフランス共和國の確立……………一二一

- 1 ドイツの統一完成
- 2 フランス共和國の確立

第三章 最近時代

二六、ロシアとバルカン半島……………一二二

- 1 ロシアの情勢
- 2 トルコの情勢

二七、ロシア、トルコの战役……………一三三

- 1 原因
- 2 戦争
- 3 サンステファノ條約

二八、ベルリン會議……………一二六

- 1 イギリスの抗議 2 ベルリン會議
- 二九、三帝同盟と三國同盟一二七
 - 1 三帝同盟 2 三國同盟
- 三〇、二國同盟……………一二八
- 三一、ギリシア、トルコ
 - 戰役……………一二九
 - 1 原因 2 戰役 3 結果
- 三二、エジプト問題……………一三〇
 - 1 スエズ運河開鑿 2 獨立と財政困難
 - 3 英佛の財政管理 4 アラビバシア
- 三三、列強とアフリカ經畧一二三
 - 1 フランス 2 ファシオダ事件
 - 3 イギリスと南阿 4 イギリスの南阿戰役 5 イギリスの政策

- 6 列國の領土
- 三四、北アメリカ合衆國と米西戰爭……………一三五
 - 1 國は一變 2 ハワイ合併
 - 3 米西戰爭
- 三五、萬國平和會議の開設一二六
- 三六、無政府社會黨の跋扈一二七
- 三七、列強の現狀趨勢……………一三八
 - 1 イギリス 2 ドイツ 3 フランス
 - 4 ロシア 5 北米合衆國 6 三國同盟の現狀 7 オーストリア
 - 8 イタリア 9 英佛協商
- 三八、世界に於ける日本の位置……………一四三

第十九世紀 第四章 紀文明史

- 三九、學藝の進歩……………一四四
- 四〇、文藝……………一四五
 - 1 哲學 2 史學 3 詩文 4 美術音樂
- 四一、科學……………一四八
 - 1 其進歩 2 科學、應用 3 蒸氣機關
 - 4 電氣力 5 醫術 6 兵器
- 四二、社會の風潮……………一五〇
 - 1 社會主義 2 赤十字社

目次終

最新西洋歴史 後編

第三編 近古史

第一章 宗教改革時代

一、イスパニアとフランス

1 イタリアの役 西歐諸國の中央集權成ると共に相互の侵略運動は生まれ、而して其舞臺はイタリア半島にのみ限られたるが如き觀ありたり。當時のイタリアは北部にベネチア共和國、ミラノ公領、中部にフィレンツェ、法王領、南部にナポリ王國等あり

普通學研究會 著

て相對峙せり。然るに、ミラノ公ルイス、スフォルツアはフィレンツエ、ナポリが聯合して已を圖るを知り、フランス王カロロ王八世を招きて二國を討たんとせり。是に於て一四九四年、カロロは兵を率ゐてイタリアに入り、遂にナポリを略したりしが、ルイスは却てカロロの勢盛んなるを忌み、法王マキシミアン一世帝及びイスパニア王フェルチナンド五世と同盟してカロロに抗せしも、是亦カロロに破られたり。其後カロロのネルイス十二世立ちてイスパニアと同盟しミラノ、ナポリを取り、ナポリは結局イスパニアの手に落つることとなりぬ。

2

神聖同盟

法王ユリウス二世はイタリアに覇たるの志ありて先づ皇帝、フランス、イスパニアと結びてベネチアを攻めたりしかば、ベネチアは却て外交術を振ひて法王、イスパニアを同盟よ

り脱出せしむ。是に於て法王はベネチア、イスパニア、イギリス及び皇帝と神聖同盟を結び、スウイス人をしてフランス人をミラノより逐はしめ、兵力を以てフィレンツエを保護國となし、尙益々發展せんとしたりしに、一五一三年中途にして歿せり。

3

ミラノ佛領となる

一五一五年フランス王フランシス一世立ちてベネチアと同盟し、再びミラノを恢復したり。然るに翌年イスパニア王歿したるを以て法王亦如何ともする能はず、遂にミラノ、フランスの手に歸しぬ。

二、宗教改革

1

原因

曩きに宗教改革の聲志士の間此起りしも、氣運未だ至らずして空しく志士を蟄息せしめしが、爲めに僧侶の專恣愈々甚だしく、之と同時に識者の嫌惡は益々甚だしかりき。時にレオ十

世(一五一三年)法王となり、サン、ペテロ寺院建立の資を得んと
して、諸國に免罪符を賣らしめしかば、之を見たる志士は慨然と
して起ち、非難の聲は再び四方に起り、改革を唱ふる聲頓みに盛
んとなりぬ。

2

ルーテルの奮起

時にドイツのウイテンベルヒ大學の神學教
授ルーテル先づ奮起して之に抗し、一五一七年意見書を草して之
をウイテンベルヒの寺門に掲げ、免罪符の非を鳴らすこと急なり
しかば、人道派の學者を始め、諸候中にも之を賛成する者少なか
らず。

3

ルーテルの破門

法王レオ十世之を聞きて大に怒り、直ちに
ルーテルをローマに召喚せんとしたりしも、行はれず、一五二〇
年遂に破門の處分を行ひたり。然れ共ルーテル毫も屈せず、却て

破門狀を公衆の前に燒棄す。

4

ウオルムス國會

時に皇帝カカロ五世はフランス王とミラノ
を争ふに急なりしかば、法王の歡心を得んとするの政策に基き、
翌年ウオルムスに國會を開き、ルーテルを召喚して其所説放抛を
迫りしも従はず、是に於てルーテルを異端者と認め、其徒と共に
國內を追放したりしかば、ルーテルはサクソニア侯の保護を受け
其城内に於て聖書の翻譯に従事することとなりぬ。

5

カカロ五世の勝利

ウオルムス國會開會後、カカロは直ちに
ミラノに出陣し、一五三年バハの戰に勝ちてフランス王を虜にし
たり。然れども翌年フランス王免されて歸國するや、法王及びイ
ギリス王ヘンリ八世と結びて再びカカロに抗す。カカロ乃ちイタ
リアに入りてローマ府を陥るゝに及び再び和議成り、相互の要求

を撤回してカロロは帝冠及びイタリア王冠を戴さぬ。

6 新教の強勢

斯る争奪の間に於て新教徒は全く抑壓を免れ、勢ひ甚だ熾んとなりしも、偶々急激なる改革派を生じて亂暴甚しかりしかば、爲めに諸侯も漸く之を惡み、却て連合鎮壓に従事せしむるの餘儀なきに至りたり。然るにルーテルは是等過激派の行動を却け、着々として新教々會組織を定め、學術を興し以て弘通を圖りしかば、北ドイツ諸侯先づ是に屬し勢ひ愈旺盛となりぬ。

7 スバイエル國會

新教の勢斯くの如くなりしと共にカロロ五世は一五二六年スバイエルに又々國會を召集し、ウオルムス勅令の勵行を決議せしめんとせしも却て新教の諸侯及び市府の爲めに抗議せらるゝに至りしかば、爾來新教徒を稱してプロテスタント（抗論者の義）といふに至れり。

8 トルコの西侵

斯る間に於てトルコは勢益々熾んとなり、ペルシア、エジプト等を征服したる餘威に乗じ、スリマン二世はフランス王と結托してホンガリアに侵入し、其王を殺しぬ。是に於てカロロ皇帝はオーストリア侯フェルチナンドをホンガリア王に選舉せしめしかば、國內の貴族二派に分れ、反對派はトルコに援を請ひ、フランス王またトルコを煽動したりしかば、スリマン乃ち再び大舉侵入してウィーンを圍みたり。是に於てドイツの新舊教徒は相一致して帝を援け、漸くトルコ軍を撃退することを得たり。

9 カルデン同盟

其後新舊の軋轢益々甚だしかりければ、一五三〇年カロロは更に國會をアウグスブルグに集め、兩派の調和を計りたりしも、新教徒の提出に係る信仰個條全く舊教徒の容るゝ

所とならず、新教徒乃ち自衛の爲め翌年シウマルカルデン同盟を結びたり。

10 クレビーの和約

是に於て帝は一旦カルデン同盟討伐を企圖したるも、當時内憂外患交々起り事態頗る急なりしかば、帝亦已むなくニウルンベルヒに宗教和議を結び、遂に新教の自由を許し漸く紛争を調停したり。

11 カルデンの役

和議成りて後、カロロ又兵力を以て新教徒を壓倒せんとし、爰にシウマルカルデン戦役起れり。乃ちカルデン同盟大敗に歸し一時新教徒の勢挫折したれど、法王は却て帝權の過大を畏れ、舊教諸侯亦帝の壓抑を豫想し窈かに新教徒に通じたるが故に、カロロが新教壓伏の大企畫も空しく畫餅に歸し、一五五五年アウグスブルグ會議に於て愈新教徒の自由を許せり。

12 カロロの讓位

翌年帝は位を皇弟フェルチナンドに讓り、自己は一僧庵に退隱して一五五八年終に殞落したり。

三、

ポルトガル、イスパニアの殖民策

1 葡人の東洋通商

東西に通ずる海路の發見以來ポルトガルは東半球を自己領域となし、イスパニアは西半球に覇を稱するに至れり。即ち、從來胡椒、肉桂、藥草等のインド貨物はサラケン人の手を経てエジプトのアレクサンドリアに齎らし、夫れより更にイタリア人の手を経てヨーロッパに輸入せしものが、一度びポルトガル人の手に依てインド航路の開かれしより、是等の商權は全くポルトガル人の手に歸し、歐洲商業の局面を一變せり。是に於てサラケン人はイタリアのベネチア人等に煽動せられ、事毎にポルトガルの妨害を試みしも、却て壓迫せられ、ポ人また能

く各殖民地等の土人を壓伏して漸次東洋に領地を増大し、一五一年にはペルシア灣口のオルムズ島を取りて東洋の根據地となすに至りしが、其翌翌年には更に支那と通商してアマカオを租借し進んで我が國の種子島に來りて通商の端をも開きたり。

2 イスパニア人の西漸 斯る間にイスパニア人はアメリカ發見以後續々其地の經營に努め、先づ西インド諸島より新大陸に及ぼし、進んでメキシコ、ペルー、チリ等をも平定したりしが、是等の地方何れも金鑛に富み、イスパニアは恰も無盡藏の金庫を有するが如き有様となれり。

3 境界の設定 ポルトガル、イスパニア兩國が斯の如き東西に發見を企て勢力範圍各別になりしかば、時の法王アレキサンドル六世は後來の紛擾を豫想して、一四九三年、カボ、ペルデ島の西

百レガの經度を境として東西各ボ、イの領分定めたりしが、後年イスパニア人マガルハエスが南アメリカより迂回してフイリピンを發見するに當り、茲に兩國の境界問題喧しかりしが、ポルトガルは遂にフイリピンのイスパニア領なるを認めて事落着せり。

4 宣教師の活動 茲にまたキリスト教宣教師は常に發見者の後に從ひて弘教を怠らず、ゼスイト派開祖ロヨラの高弟等はインドより東進して支那、日本にまで至りしといふ。

5 兩國殖民政策の失態 斯の如く兩國は最侵略に勇なりしかど治民の術甚だ拙劣にして、徒らに殖民地の利得をのみ吸収して土民を虐待しければ、漸次領地産業の衰頹を來すと共に本國亦衰へて流石の國富も永續すること能はざりき。

四、宗教改革の普及と反動

1

新教各派の弘通　アウグスブルグ宗教和議後、新教の勢は益々盛んとなり、十六世紀の末葉には其弘通するところ殆んどドイツ全國に及びたり。

イ、ルーテル派　即ち新教の元祖にして、ルーテルの唱導したる所に依る。範圍はドイツ全部、デンマルク、スウェーデン、ポーランド及びホンガリアに及びり。

ロ、ツウイングリ派　即ちスウイス、チウーリツヒの人ツウイングリに唱出せしものにして、ルーテルよりも更に激烈なる新教に屬し、専らスウイスの各地に行はれたり。

ハ、カルビン派　即ちフランスの人カルビンの唱へしものにして、前記二派の中間に立ち、専らスウイス、オランダ、スコットランド、フランス及びドイツの自由市間に傳播し、俗に清教

徒と稱する一派是なり。

2

新教の弱點　斯の如くにして新教は破竹の勢を以て全歐に擴らんとせしが、惜むべし其各派は互ひに相和せずして反目を事とし、加ふるに其教義も多く幽遠の理論に涉り、人の想像感情を満足すべき無害の儀式典禮をも斥けて顧みざりしかば、舊教敏くも此弱點に乘じ、法王以下僧侶輩の反省となり、品行を慎み、教義を修正し漸く民望を恢復したり。

3

ゼスイト團體　是に於て一時熾んなりし宗教改革の聲も從ひて反動大に起りたり。殊にイスパニア人ロヨラは新教に對し法王の威權を維持せんと欲し、一五四〇年にはゼスイト團體を組織して人材を教育し、盛んに各地に弘教し、イスパニア王フィリポ二世また舊教を勵行してヨーロッパに覇たらんとするの大經綸は俱

五、

に期せずして舊教再興に力ありしものなり。
オランダの獨立

1 イスバニアの強大

當時イスバニアは多大の領地を保有して繁盛無比を極めしが、時に國王フィリポ二世は父帝の讓を承け、イギリス女王マリアと婚し、益々新教の抑壓を試みたり。

2 ネーデルランド

イスバニアの領地なりしが、土地平坦交通の便づく開け、商工業また頗る活潑にして早くより新教を奉じたり。是に於てフィリポは之を撲滅せんと企畫し、王妹マルガレタをブラッセルに駐在せしめ、宗教裁判所を置きて益々新教徒を苦しめんとせしかば、國內の教徒一時に起り、到る所の舊教寺院を破り、偶像を壞ち圖書館を焼失する等勢ひ甚だ猖獗なり。フィリポ王乃ちアルバ公に命じて之を鎮壓せしめしが、公能く命を奉じ

て殘虐至らざるなし。是に於てか人民愈々憤慨興起、一時に反抗の狀態を示せり。

3 ユトレヒト同盟

一五七八年、バルマ公更めてネーデルランドの總督たるや、南部諸州が尙舊教徒多きに乗じ、舊來の自治を約して歸降せしめしが、北部の七洲は遂に其翌年ユトレヒト同盟を組織して一五八一年には斷然獨立を宣言し、オランダシウ侯ウイレルムを推して世襲の總督と成せり。是今のオランダ國なり。

4 英國の援助

其後ウイレルムは刺客に殺されしが、子モリス父の遺志を繼ぎてよくイスバニアと戦ひしに、イギリスまた其衷情を察して之を援け、一五八八年にはイスバニアの無敵艦隊を粉碎せしかば、イスバニアの兵勢頓に挫折し、越えて其翌年にはフィリポ王も全く絶望して一六〇九年には遂に十二ヶ年間の休戦を

約したり。

5 獨立完成 斯る間にオランダは銳意航海に努め、後ち一六四八年にはウエストフアリア條約結ばれてオランダ共和國の獨立遂に公認せられぬ。

六、イギリスの宗教改革

1 ヘンリ八世 イギリス王ヘンリ八世は宗教改革に反對して、ルーテルの説を駁し、法王よりは信仰保護者といふ稱號さへ得たるものなり。然れども法王が種々の名義の下にイギリス君民より金錢財物を徵收せしを以て漸次法王と分離するに至れり。

2 王后離婚問題 斯る意嚮を萌せし時に於て、端なくも分離の近因を爲せし事件起りぬ。即ち、王は父の命に依て兄の寡婦たるカロロ五世帝の叔母なるカタリナを后となせしも、後ち之を廢せ

んとし法王の裁可を請ひたり。然るに、法王はカロロ帝を憚りて容易に之を許さず、是に於て王はイギリス宗教裁判に於て之が離婚を決し、宮女アンナ、ポレインを娶り、一五三四年には議會及び僧侶の翼賛によりて政教上の主權者たることを宣言し、爰に斷然法王と分離するに至りぬ。

3 イギリス教會 一五四七年エドワルド六世立つや、大僧正クランマーの輔佐により、教義の疑はしきものは之を悉く新教の所説に従はしめ、議會の認可せる祈禱書に依りて儀式を定むる等、即ちアングリカン教會の基礎爰に成りぬ。

4 マリア女王 一五五三年其の異母姉マリア繼ぐ。イスパニア王フィリポ二世と婚して之を援け、舊教を固執して新教徒を苦めフランスと戦ひて領土を絶無にする等大に國民の非難を招けり。

5 エリザベタ女王

既にして異母妹エリザベタ繼ぎしが、マリ
アと異りて明敏、よく人を用ゐて舊教を廢絶し、アングリカ
教を確立して極力イスパニア王の政略に反し、オランダの獨立を援
け或ひは西インドを侵す等其經綸見るべきもの多かりしが、殊に
一五八八年イギリス海峡に於てイスパニアの無敵艦隊を粉碎した
る功績は最顯著の事實なり。是よりイギリスの海軍非常に發達し
航海殖民の業隆然として振起するに至れり。

6 文運隆盛

一方斯の如く國力の發展を見たる傍ら、其治世
はまた文藝隆盛の極致を現したりき。即ち絶妙なる戯曲を以て今
尙有名なる大詩聖シエクスピア、能詩の譽高かりしスペンサー、
ベンジオンソン、歸納法を唱出せしペーコン等多くの名家を輩出
せり。

七、フランス宗派の争

1 ユグノー

フランスにはカルピン派の新教行はれ、其徒をユ
グノーと稱せり。然るに國王フランシス一世及び其子ヘンリ二世
は政略上ドイツの新教派を援けてカロロ五世と戦ひしとはいへ、
自國に於ては斷然新教の嚴禁を厲行せしかば、新舊兩派黨を分ち
て相争ふに至りぬ。

2 ユグノーの役

一五六〇年カロロ九世立ちしも尙幼かりしか
ば、母后カタリナ政を攝せしが、舊教を奉ずるギーズ侯の專横を
惡みし結果、新教徒に幾分の自由を許し之と相對せしめて以て之
を抑へんとせしかば、疾く舊教徒の激昂を招き、一五六二年遂に
ユグノーの役開かる。

3 センジエルメンの媾和

斯くして新教徒はイギリス及びドイ

ツの新教諸邦、舊教徒は法王及びイスパニア王フィリポ二世の後援を受け、各相對峙して紛争を續くること數年に互りしが、カロロ九世親政するや却て強大なるイスパニアを忌み、新教徒の力を借りて之に當らんと欲し、其首領たるコリニを擧げて宰相となし、且つ王妹を新教徒の奉戴せるナバラ王ヘンリに嫁することゝ約せり。

4 バルトロメオ祭日の虐殺

然るに母后カタリナは之を忌み、同年八月二十四日セン、バルトロメオ祭日の夜半不意に起りて市中の新教徒を殺戮し、以て宰相コリニ以下數万に及べり。是に於て内亂また再熾す。

5 ブルボン王朝

一五七四年ヘンリ三世立ちて新教徒を寛待し以てイスパニア王の野心を挫く。會々王弟死して嗣子なかりしか

ば、ヘンリを立たしめんとす。是に於て舊教徒イスパニアと同盟して之を妨げ、加ふるに新教徒の剿絶を期す。然るに王は舊教徒の首領ギーズ侯の専權を憤りて之を殺し、次いで已れまた舊教徒の爲めに殺されしかば、王位は期せずしてナバラ王たるヘンリに歸し、ヘンリ四世と稱してブルボン王朝を茲に始む。時に一五八九年。

6 ヘンリ四世の經綸

ヘンリ四世は深く國內の情勢に鑑み、先づ自ら舊教に改宗して其徒を和げ、ついで一五九八年にはナント勅令を發して信教の自由を許し以て新舊兩教の同權を公認したりしかば、數十年來の紛亂初めて平定す。是に於て王は全力を國內の政治に注ぎ、教權を固定してイスパニアを抑へ以て大に國威を張らんとせしが惜むべし中道に於て兇徒に弑殺せられぬ。時に一

八、三十年戰役
六一〇年。

1 原因
ドイツにてはアウグスブルグの宗教和議以後、國內一時靜穩なりしが新舊兩教徒の反目軋轢は猶依然として存し、一五七六年ルドルフ二世即位と同時に再び紛擾惹起せり。帝は熱心なる舊教信者なりしかば、新教徒を壓迫すること甚しく、爲めに新教徒は同盟を結びて自衛手段を執りしが、舊教徒亦聯合してこれに對抗することゝなれり。後ち帝歿してマチアス帝即位し、從弟フェルチナンドを擧げてボヘミア王となし新教徒を抑壓すること甚しきと同時に争亂遂に破裂し一六一八年所謂三十年戰役なるものを起すに至れり。

2 戰役

イ、ボヘミアの役
一六一八年より同二三年に至る第一期戰にして、初めボヘミア人は國王フェルチナンドの抑壓を憤り、一度叛旗を翻せしも、翌年マチアス歿してフェルチナンド王皇帝となりしかば、ボヘミア人は新教の首領フレデリキ五世を戴き、王舅英王ゼームス一世の援助を借らんとしたり。然れども帝はイスパニアの援軍及び舊教聯合軍を以てブラーグ附近に破り以て新教軍を鎮壓したり。

ロ、デンマルクの役
一六二五年より同二九年に至る第二期戰なり。即ちデンマルク王兼ホルスタイン公なるキリスチャン四世は、ドイツ新教徒の應援を口實とし、イギリス、オランダ兩國の後援を借り以て侵入したりしが、帝國軍の指揮官たるソレンスタイン、舊教聯合軍の頭領たるチリー等のために屢々敗軍

し、本國の諸所亦占領さるゝに至りしかば、遂にリベック和議に於て爾後一切ドイツの國事に干渉せざることを約して退きたり。

ハ、スウエーデンの役

一六三〇年より同三五年に至る第三期戦なり 即ち、スウエーデン王グスタフ、アドルフは新教徒の保護及びバルト海制海權を獲得せんがためドイツに侵入したり時にワレンスタイン嫉まれて野に下り、英佛二國またスウエーデンに力を合せしかば、ドイツ軍連敗し、加ふるに皇軍の將チリイまた陣歿せり。是に於てワレンスタイン再び皇軍の將に拜せられ、一六三二年リウツェンの野に兩雄決戦、スウエーデン軍大勝したるも、グスタフ王陣歿せしかば、戦ひ遂に決せず、

ニ、スウエーデン、フランス聯合戦役 一六三五年より同四八

年に至る第四期戦なり。即ち、スウエーデンはフランスの後援を受け尙戦争を續けしが、ドイツにてはワレンスタイン再び罷められ、フェルデナンド帝次で殞落し、イスパニアまた援軍を撤回し、諸侯も戦に倦みたりしかば、フランスの宰相マザレン關係諸國間に斡旋してウエストファリア條約を結ばしめ、以て戦役の終局を告げたり。

3

媾和條約 即ちウエストファリア條約なるものは左の如し。

- (一) スウイス、オランダの兩共和國獨立を公認すること、(二) スウエーデンは北ドイツのポメラニアの地と償金五百万圓を得ること、(三) フランスは北境の領土即ちメッツ、ツール、ベルダンの三寺領及びエルサスに於けるオーストリア領を得ること、(四) ブランデンブルヒ、パワリア、ファルツの三選舉侯は其領

地を擴張すること、(五) 新舊兩教徒各同一の權利を得ること。

4 結果 此戦役は前後三十年間に亘り、各強國何れも關係せしかば其影響する所極めて大なるものあり。然れども其最多くの災害を被りしはドイツにして、爲めに田園は荒敗し、人口は減少し都府零落、商工業萎微したる結果、皇帝は統一の實權を失ひ諸侯は獨立割據して國力頓に減退したり。

第二章 強國勃興時代

九、オランダの隆盛と殖民策

1 イスバニアの衰微 第十六世紀より十七世紀前半に亘り流石富盛を恣にしたるイスバニアは、世運の一轉と共に其元氣大に衰へ、一六四〇年にはポルトガル國も遂に獨立するに至れり。

2 オランダの發展 是に反してイスバニアの屬領たりしオラン

ダは第十七世紀に至りて益々隆盛の極に達し、世界的商業に従事せる商船は其四分の三を有して列國を壓倒し、以て海運事業を獨占するに至れり。

3 東方經綸 而して獨り海運事業を獨占するのみならず、一六

〇二年には東インド商社を創設して東洋及び南洋方面の經營に着目し、彼のイスバニアが一時ヨーロッパ事件に忙しくして殖民地の保護に暇なきと、ポルトガル人は到る處土人の怨を買へるに乘じて奇利を博し勢威を振ひ、以て漸次夫れ等の領域を蠶食し、商利を獨占し、我が國の如きへも獨り貿易通商の特權を獲得したり。

4 西方經營 オランダ人は尙東方にのみ伸張せるに非ず、一六二一年には西インド商社を創立してブラジルの半を占領するに至

れり。然れどもブラジルは一六六一年に至りポルトガルより代償金を得て之を返付したり。

5 殖民策 斯の如く一時に發展せし理由は全く其殖民策が成功したるものにして、彼の西葡の如く土人を虐遇せず宗教を強いす平和手段によりて商利を得しものに外ならず。然れども其本國に至りては七洲各々獨立の状態を呈し、國內の黨争甚しきが故に機敏秘密の政策行はれざりしかば、永く其隆運を維持すること能はず、遂に勢力中心はイスパニアよりフランスに移るの已むを得ざるものありき。

10、フランスの國家主義確立

1 名宰相出づ フランスは曩きに宰相リシウウーの劃策効を奏し、内は王權の確立を告げ、外はハブスブルグ家に抗することを得

得て列國首力の基を開きたるが、次に相となりしマザレンまた其遺志を繼ぎ、幼王ルイス十四世を輔けてウエストファリアの條約により領土を擴めたるのみならず、尙イスパニアと戰爭を續けて一六五九年には遂にピレネー條約を結び、イスパニア王フイリポ四世の女を納れてルイスの皇后となすに至れり。

2 ルイス十四世 一六六一年マザレニ死するや、ルイス十四世萬機を親裁して大に人材の登用を試み、以て益々王權を擴張し、國光を輝かすに至れるが、就中財政の任に當れるコルベールは經濟の才に長じ、爲めに國內の商工業靡然として興り、航海の業また大に振起するに至れり。

3 文藝美術 王はまた頻りに文學美術の獎勵を爲せしかば、文運も大に興起し、ユルネイエ、モリエール、ラシーヌの如き大家

を出すに至れり。

一、フランスの外國侵略

1 ネーデルランド侵攻

ルイス十四世は内政の整頓と共に國力の充實を告げしかば、大に國威の發揚を企てし折柄、一六六五年にはイスパニア王フィリポ四世歿し子カロロ二世立ちしかば、ルイスは王後の權利を主張してイスパニア領ネーデルランドを要求し兵を出して之を占領せり。然るにオランダフランスと境を接するを忌み、イギリス及びスウェーデンと三國同盟を結び、以て之に抗したりしかば、一六六八年遂にアムステルダム條約に依りてルイスは其侵地を棄て僅かにネーデルランドの數市を得るのみとなれり。

2 オランダ侵入

是に於てルイス大にオランダの干渉を憤り、イギリス及びスウェーデンを説きて己れと結ばしめ、一六七二年

には親ら大軍を督してオランダに侵入したり。然るにオランダ總督ウイレム三世は國人を勵まして佛軍に當る傍ら、巧みにフランスの同盟諸邦を離絶せしめ、却てイスパニア、ドイツ等の援助を得るに至りしかば、局面は茲に一變して遂にルイスは一六七八年ナイメーヘンの和約を結び、其侵地を還附して僅にイスパニアより二三の要地を奪ふの已むを得ざるに至れり。

3 フアルツ侵畧

其後フアルツ選舉侯の死するや、ルイスは弟オルレアン公夫人の相續權を主張して、一六八八年にはフアルツを略取せんとす。然るにウイレム三世イギリス王となりて之を妨げ全歐洲を合従してルイスに敵したりしかば、一六九七年ライプツイク和約と共にルイスも軍を撤したり。

二、イギリスの革命

1 スチユアート朝

一六〇三年エリザベタ歿せしかば、スコットランド王ジェームス六世入りてイギリス王となり、ジェームス一世と稱しスチユアート朝を創む。然るに常に議會と争ひ外政に失敗して大に民望を失ひし折柄、其子カロロ一世に至りては議會との衝突益々烈しく、議會を解散すること前後二回、遂に十一年間は全く議會を召集せずして國政を處斷し、且つ國教制を厲行して清教徒を抑壓しければ、志士の多くはアメリカの新大陸に逃れ人心愈恟々たり。

2

長期議會 時にスコットランドの反あり。王乃ち止むなく議會を召集して軍資の支出を求めしも、議會之に應せず。是に於て忽ち議會の解散となり、更に新議會の召集となりしも益々反抗の勢を増し、其氣焰當るべからず、王乃ち憲法に背き兵を率ゐて議

會に臨み、反對議員を捕へんとせしが成らず、人心は徒らに激昂して内亂遂に起りたり。

3

第一の革命 先づ王黨と議會黨との間に於て激戰數回ありしも王黨遂に敗北し、王は議會黨の首領クロンウエルの爲めに捕へられたり。然るに當時議會黨更に分れて、君民同治を行はんとするプレスビテリアンと、僧俗の別を除きて共和政治を行はんとするインデペンデントの二派となり、更に争鬪激烈を極めしが、遂にクロンウエルは兵力を以てプレスビテリアン黨を壓し、王は議會裁判に依て一六四九年死刑に處せられ、共和政治爰に成れり。

4

クロンウエル 是に於てクロンウエルは自らプロテクトルとなり、大に武斷政治を行ひて舊教徒を壓し、奢侈遊戯を嚴禁して更に新教諸國の大聯合を作らんとし、先づオランダに交渉せし

も其應せざるを怒り、一六五一年航海條例を發してオランダの商業、漁業を妨げ、之と干戈を交へて海上勢力を挫き、フランスと結びてはイスパニアを破る等、大に功果の見るべきものありしも其武斷政治と清教教義の嚴峻に過ぐるとは漸く國民をして嫌惡の念を生せしむるに至りぬ。

5 王政復舊 一六五八年クロンウエル死すると共に、國民は之を好機とし前王の子カロロ二世を迎へて王位に即かしむ。王素行修まらずしてルイス十四世と結び、大に王權を擴張し、舊教を保護せんとするの傾きありしかば、一六七三年議會は審査律を通過せしめて官吏議員の舊教を奉ずるを得ざらしめ、一六七九年には人身保護律を議決して民權の伸張を計りたり。

6 ジエームス二世 時に議會は尙進んで、舊教を奉ずる王弟ジ

エームスの王位繼承權を削らんとしたりしに、忽ち議會二派に分れ議容易に纏らず、間もなくカロロの歿すると共に、ジエームス二世遂に王位に即きぬ。

7 第二革命 一に名譽革命ともいふ。即ち、ジエームスの登極と共に舊教の復興を計り、審査律を無視して稍專制主義に傾かんとせしかば、議會の兩派は忽ち一致して事を豫防せんがため、ジエームスの長女マリアの夫たるオランジウ侯ウイレルム三世を招きたり。一六八八年ウイレルム乃ち兵を率ゐてイギリスに上陸す是に於て王はフランスに逃走したりしかば、議會はマリアとウイレルムを共同の君主となしぬ。

8 ウイレルム三世 ウイレルム三世王位に即くや、前代の弊政を改め外交方針を一變し、權利條例に依りて國民及び議會の權利

を明確にし、専ら國民黨たるホイグ黨の人士を登用して政黨内閣の端を開きたり。此間ルイス十四世はジェームス二世の復位を計りたるも成らず、終にライスウィク條約に於てウイレルム三世のイギリス王たるを承認することゝなりぬ。

一三、
イスパニア王位繼承の役

1 原因

一七〇〇年、イスパニア王カカロ二世殞落して世子ヨセフまた其前年に歿したれば嗣なし。是より先、ドイツ帝レオポルドは皇孫バワリア侯ヨセフ、フェルヂナンドを、フランス王ルイス十四世は孫フィリポを各後嗣たらしめんとしたり。然るに、カカロ二世はフェルヂナンドを後嗣に指定したるも王に先ち一六九〇年死歿したりしかば、已むを得ずフィリポを嗣子に定めて殞落したり。是に於てフィリポ五世即位し、フランス王は内心喜悅

して密に兩國の合一を期したり。然るに歐洲諸強は權力平衡の攪亂を恐れて英、獨、蘭の大同盟を作り、ドイツ皇帝の次子オーストリア公カカロをイスパニア王の候補者と定めてフランスに對抗することゝなれり。

2

戦況

是に於て、イギリスのマールボロ公、オーストリアのサボヤ公たるエウジエニオ等同盟軍の將として屢々フランス軍を破り、ブレンハイムの戦にはフランス、バワリアの聯合軍を全滅せしめ、翌々年はまた之を敗北せしめしかば、フランス王は窮困の末和儀を提出したるも同盟軍は之を拒絶して尙攻戦を續行したり。偶々一七一〇年、イギリスに政變ありて、保守黨たるトリーリア黨内閣を組織して平和論に傾き、翌年はドイツ皇帝歿してオーストリア公カカロ之を継ぎしかば、爰に形勢一變し、遂に一七一

三年ユトレヒトの媾和條約と成り、以て戰亂の局を結ぶ。

3 結果

- (一) ヲイリポ五世の王位を承認し、イスパニア、フランスの合同を永久に實行せしめざること。
- (二) サボヤ公はサボヤ、シチリア國王の稱號を得ること。
- (三) ブランデンブルグ侯はブランデブルグ王と稱すること。
- (四) イスバニアはジブラルタル、ミノルカ島をイギリスに、ミラノ、ナポリ、サルヂニア、ネーデルラントをオーストリアに讓與すること。
- (五) フランスはニウーフアウンドランド、ノフスコチア、ハドソン灣地をイギリスに割讓すること。

一四、北歐と東歐諸國の盛衰

1 スウェーデン

イ、勃興　デンマルク、スウェーデン、ノルウェーは、一三九七年相合して一王を戴きしが、一五二三年に至りスウェーデンは分離獨立してグスタフ、ワサ其王となり、新教を奉じて通商を奨勵し、大に國權を伸張せしが、次いで立ちしグスタフ、アドルまた大に司法行政を改革し、教育の普及を圖りて通商航海を奨勵せしかば國運駿々として進み、殊に其軍隊は精銳無比と稱せられたり。

ロ、國力充實　是に於て、王は兵を率ゐてロシア、ポーランドを破り、三十年戰役には大に勇名を馳せて北歐の盟主と仰がれ再轉してカロロ十一世また銳意内治を圖りしかば、王權の伸張行政の改革、財政の整理、商業製造の興隆等着々其歩を進め、其子カロロ十二世の代に至りては國力の充實よく其雄飛に堪へ

得るまでとなれり。

2

ポーランドの國情

ポーランドはもとドイツ王國に隸屬せる
スラブ種の國なりしが、一三〇六年、ブラヂスラフ一世ドイツと
り分離してポーランド王と稱し、爾後漸次附近を蠶食したりと雖
國內の統一鞏固ならず、各州皆法律行政を異にして貴族の專横甚
しく、加ふるに一五七二年選舉王國となりしよりは益々王權微弱
となり、國會は常に紛擾を極めつゝありしかば、一度びスウェー
デン軍の侵襲に遭ふや忽ち一敗地に塗れて起つ能はず、漸次衰微
の傾向を招きたり。

3

プロシア王國

プロシア王國はもとドイツの一小藩なりしが
一四一五年にはブランデンブルグ選舉侯となり、一六一八年には
ポーランドよりプロシアの地を得て國勢次第に盛んとなり、フレ

一五、

ロシアの勃興

1

ロマノフ家

ロシアは一五九八年ルーリク家絶えて内訌屢
々ありしが、一六一三年には帝位ロマノフ家に歸し、數世を経
てペテロ大帝に至れり。

2

ペテロ大帝

ペテロ一世大帝即位すると共に、ロシアが未だ
良港を有せざるを慨し、先づアゾフをトルコより奪ひて後ち、親
らオランダ、イギリス等の諸國に遊び、造船術其他諸種の技藝を
修めて歸國し、以て大に制度風俗を改良し、専ら西歐の文物に則
りて學問、工業を興し、陸海軍を整備して自らギリシア、カトリ

ツク教主を兼ね、斷乎として一新の大業を行ひたり。

一六、北歐の役とポーランド繼承の役

1 北歐の役

イ、三國同盟

ペテロは斯くて益々バルト海東岸に領土を拓かんとするの志ありしかば、先づデンマルク王フレデリキ四世及びサクソニア公兼ポーランド王オーグストと結びて三國同盟を作り、スウエーデン王の年少なるに乗じて之を伐たんとせり。

ロ、カロロの勇猛

然るにスウエーデン王カロロ十二世は年未だ弱冠なりしかど非凡の將才あり。三國同盟成るや、一七〇〇年直ちにデンマルクに入りて大に勝ち、轉じてロシアに向ひ、ペテロの軍を紛碎して尙ポーランドを畧し、一七〇四年にはオーグスト王を廢してスタニスラ、レスチンスキを選立せしめた

り。

ハ、ペテロの剛腹

斯る間にペテロは兵を練り、軍を整へて、フィンランド地方を征略しペタルブルグ府を新設し、ナルバを取りてバルト海東岸の主權を固定したり。

ニ、ホルタバの戦

既にしてカロロのロシアを侵すや、ペテロ銳を避けて其糧道を絶ちしかば、カロロは大にホルタバに敗北し辛ふじてトルコに逃投しぬ。是に於てオーグスト、ポーランドの王位に復し、ペテロはバルト海の東岸を併せたりしかば、カロロ遂にトルコを煽動してロシアと戦はしめ、以て之を破りたれば、ペテロはアゾフを還附して和を講ず。

ホ、終局

一七一四年カロロは本國に歸りてデンマルクよりソルウエーを奪はんとせしが戦死したりしかば、一七二〇年スウ

エーデンはロシア、プロシア等にバルト海東南岸の地を割譲して北方の役を結びたり。是よりスウェーデン大に衰へ、ロシア新興の勢益々加はりぬ。

2

ポーランド継承の役

ペテロ大帝より三傳して一七三〇年女

帝アンナ立つや、時しもポーランド王オーグスト歿して諸國其嗣王に干涉す。アンナ乃ちドイツ帝カロー六世と共に先王の子オーグストを立てんとし、フランス王ルイス十五世はイスバニアと協力してスタンスラ、レスチンスキを推し、かば、遂に大亂を醸したり。

然れども一七三八年ウィーン條約成ると共に、レスチンスキは王位の要求を棄て、事落着す。

一七、

オーストリア継承の役

1

プロシアの勃興

一七一三年フレデリキ一世の子フレデリキ

ウイルレム一世立つや、益國政を整理して發達を圖り、北方の役にはペテロ大帝と結びてポメラニアの西部を得、以て國力を培養しければ、太子フレデリキ二世立つと共に大々的發展を試むるに至れり。

2

継承の役の起因

ドイツ帝カロー六世男子無かりしかば、一

七一三年家憲ブラグマチツシユ、サンクチオンを發して其女マリア、テレサに王位を継承せしめんとして列國の承認を希望する折柄、一七四〇年帝死したるを以てマリア其遺領を繼ぎしかば、四方の各國之に容喙し、各強國の後援を得て継承權を主張したり。

3

第一回シレジアの役

時にプロシア王フレデリキ二世大王は

突然兵を出してシレシアを占領し、尋いでフランス、イスバニア

等同盟してオーストリアを討つ。オーストリアはイギリスの援助ありたりと雖、同盟軍の勢盛んにして對抗するを得ざりしかば、一時カロロ、アルベルトを皇帝に推選しカロロ七世と稱せしめぬ此間マリア、テレサは大にホンガリア人の同情を得、次いでシレシアを割きてプロシアと和し以て大に勢を恢復し、一舉同盟軍を破りたりき。

4 第二回シレシアの役 時にプロシア王はオーストリア軍の勢

日に盛んなるを見て心中安からず、再びフランス及びカロロ七世と結びてポヘミアに侵入し、オーストリア軍の勢を挫きしが、一七四五年カロロ七世死してパウリアとオーストリアの和成り、マリアの夫フランシス一世選ばれて帝位に登り、同年ドレスデン條約を結びてプロシア王はシレシアの領有を確定し、同時にフラン

シス一世の帝位を承認せり。

5 アーヘン和約 其後尙同盟軍との戦ひは依然として繼續せら

れしが、イギリス先づカロロ、エドワードの亂起りて撤兵し、其他の各國亦戦に倦みて遂に一七四八年アーヘン條約成りて和儀整ふ。此役に於てプロシアは從來の瘠地に加ふるに豊沃なるシレシアを得たりしかば、人口大に増加し、國運益々進歩の域に向へり

一八、七年の役

1 原因 マリア、テレサは一旦プロシアに譲りしも其怨忘る、

こと能はず、銳意國政を整理して國力を充實し、徐ろにシレシア恢復の策を劃し、先づロシアの女帝エリザベタ、サクソニアの選舉侯兼ポーランド王オーグストと結びて對プロシア同盟を作り、且つイギリス、フランスの一を引きて之に加盟せしめんとせり。

會英、佛の二國は北アメリカ殖民政策の爲め衝突を起し、イギリスは早くもプロシアと同盟せしかば、オーストリアは機乗すべしとなしてフランスを引き入れ、以てプロシア分割の約畧成らんとせり。

2 戦争

然るにフレデリキは機先を制してサクソニアを占領したれば、オーストリアは遂に同盟國と共に戦端を開く。此役やフレデリキ善く戦ひて屢々奇勝を博したれども衆寡敵せず、且つイギリスの宰相ピット退けられて同盟國を失ひ軍資の供給絶え、フレデリキの窮厄其極に達したれど、王は死を決して毫も屈せず。

3 和約成る

偶々天運循環して局面全く一變したり。即ち一七六二年ロシアのエリザベタ歿すると共にペテロ三世即位するや、對プロシア同盟を脱し、イギリス、フランスの二國また和議成り

一九、英佛殖民策の衝突

1 イギリスの政策

新大陸に於ける殖民政策は、イスパニア、オランダ相次いで之が經營に怠りなく、益々進境を見つゝありしが、イギリスは一五八八年イスパニアの無敵艦隊を撃破してより同國の殖民地に對する事業俄かに勃興し、エリザベタ女王の世、已にアメリカにバージニア殖民地を開き、次でオランダよりニュ

4 結果

此役に於てプロシアは辛くもシレシアの地を保有したるのみなりしと雖、獨力よく列國の攻撃に當り、七年の久しき其局に堪へたりしかば、大に國威を發揚し、フレデリキ大王の武勇は各國に承認せられて、他日ドイツに霸たるの基を開きぬ。

しかば、オーストリアも遂に兵を撤し、一七三二年フヘルウスブルグ和議成立して戦局結ばれたり。

1、アムステルダムを奪ひ、ニュー・イングランド植民地を創設してより漸次其境域を擴張するに至れり。

2 フランスの政策

フランスも亦十六世紀の末より既にカナダに殖民し、ルイ十四世の時ミシシッピ河兩岸の地を領有してルイジアナ植民地を起し、其領土漸次イギリスに接近し、遂に兩者の衝突を見るに至れり。

3 兩國の衝突

一七五六年ヨーロッパに於て七年戦争起るや、イギリス、フランスの兩國は其植民地に於て互に相争ふに至れり而してイギリス軍常に勝利を占め、カナダ及びフランス領西インド諸島は悉く其占領する所となり、北アメリカに於けるイギリスの勢力は日に盛んなるに至れり。

二〇、北アメリカ植民地の獨立

1 原因

北アメリカに於けるイギリス政府の勢力盛んなるに至るや、其植民地に對する政策は漸次専制に傾き、植民地人民の不平漸く高まるに至れり。特に七年戦役政府の財政頗る困難となりしかば、植民地人民の課税益々重く、一七六五年議會の協賛を経て印紙條例を發布し、植民地に於ける商業上の取引、土地賣買等の契約には總て印紙を貼るべきことに定めしかば、植民地人民の大反抗となり、一旦之を廢止せしも、更に其翌年茶、紙、硝子、繪具等に課税し、之も大反抗に遇ふて茶税以外を廢止せしに、一七七三年にはボストンにて茶船狼籍事件起りてイギリス政府遂に兵力を用ゐ、之を威壓せしに依り、植民地十三洲の人民大に激昂して一七七五年には各洲の委員フィラデルフィアに會し、ウオシントンに頭領に載き、以て獨立軍を起し翌年七月四日には獨立

宣言書を天下に公表せり。

2 獨立戰爭

一度殖民地獨立の報ヨーロッパに傳はるや、フランス、イスパニアは兵を送りて獨立軍を援け、ロシアは武装中立同盟を起して陰に援助を興ふる等、大に獨立軍の勢ひ振ひ、一七七七年にはサラトガにイギリス軍を破り、一七八一年には英將コーンウォリスをヨークタウンに圍みて之を陥れ主將以下七千餘人を捕虜とせしかば、イギリス政府も其到底敵せざるを知り、一七八三年九月には遂にベルサイユの和議を見るに至れり。

3 ベルサイユ條約

即ち左の如し。

- (一) 北アメリカ合衆國(殖民地の十三洲)の獨立を承認すること
- (二) イギリスはカナダ、ニュー、ファウンドランド島、ノヴァスコチアを保有すること。(三) セネガルをフランスに、フロリ

ダ及びミノルカをイスパニアに讓與すること。

二二、北アメリカ合衆國の確立

1 合衆國憲法

一七七九年を以て合衆國の新憲法成る。即ち聯

邦(十三洲)共和政體にして、元老院、衆議院の二院制度を持し、任期四年の大統領を選出して合衆國の行政を總監せしむる等なり

2 第一期議會

一七八九年を以て新國會召集せられ、ジョージウオシントン選ばれて大統領となる。

3 奠都 一七九一年には合衆國の首都をウオシントンと奠められたり。

二三、ロシアの侵畧

1 カタリナ二世

一七六二年ロシアの女帝カタリナ二世其夫ペテロ三世を弑殺して位に即き、ペテロ大帝の遺志を継ぎ、大に侵

略主義を執れり。即ち心をトルコ、ポーランド方面に注ぎ若し出來得べくんば全トルコを征服して都をコンスタンチノブルに遷さんとするの大野心を抱合したり。

2 東方侵畧　ロシアのシベリア侵略はイバン四世の時、コサツクの酋長イルマク、オビ河畔の地を征略せしに始まり、其後の諸帝概ね其遺志を繼ぎて一六三二年の頃にはカムチアツカに達し、ペテロ大帝の時には一六八九年のネルチンスクの條約に據りて清國との境界を議定し、一六九七年初めて日本と交渉を開きたるものなり。

三三、ポーランドの滅亡

1 第一回分割　一七六四年ポーランド王オーグスト三世歿して國內紛擾を極む。ロシアのカタリナ二世其寵臣を推舉して王とな

し、遂に兵力に訴へて大に干渉を試みしかば、ポーランドの國人大に憤慨してトルコの援を得、以て之に抗せしかばカタリナ兵を出して先づポーランドを征し、更にトルコを攻めて之を敗る。是に於てプロシア王フレデリキ二世、國力の平均を失はんことを恐れ、オーストリアと結んでロシアに交渉し、一七七二年遂に三國間にポーランドの第一次分割を行ひ、各々其國境に接せる地を畧取せしが、其後ロシア、トルコの和成り、ロシアは黒海北岸の一部を得たり。

2 第二回分割　第一次分割に依てポーランド國人は大に憤慨し一七九一年憲法を改めて選舉王制を廢し以て世襲となし、國會の決議を多數決となす等頗る見るべき改革を施さんとせしに、カタリナ二世之を見て悦ばず、私かにロシア黨の貴族を煽動して新憲

法に反抗せしめ、兵を送りて之を助けしかば、志士コツシウシコ等義兵を擧げしも却てロシア軍に破られ、新憲法茲に破棄を見たるが、ロシア王又々ロシア獨り利益を得んことを畏れ、志士の懇願を却けてロシアと兵を併せ、以て一七九三年其第二次分割を行ひたり。

3 第三回分割

其後ロシアは益々ポーランドの内政に干渉したるが故に、志士コシウシコ等憤懣遣る方なく、一七九五年遂にクラカウに義旗を翻へしたるも、軍は又々敗れ、コシウシコも捕へられたるを以て、ロシアは斷然ロシア、オーストリアと協議を凝し、最後の分割を行ひ、茲に全くポーランドの滅亡を見るに至れり。

二四、十八世紀に於けるヨーロッパの情勢

1 情勢

第十八世紀は各國の中央集權完成したると共に、革新的思想大に勃興し、以て舊習舊制を打破したれば、推理實驗の思想、器械工藝品の發明盛んに起り、以て第十九世紀物質文明の基礎を開始したり。

2 風潮

ルイス十四世出で、國交的君主主義と宮廷の禮容華美をてらひたるは、各國朝廷の争ひて摸倣する所となり、以て十八世紀に於ける歐洲風潮を爲し、之に伴ひて革新文學現出するに至りぬ。

3 政治

ペテロ大帝出で、未開のロシアを一躍の下に西歐諸強國と列せしめ、フレデリキ二世、カタリナ二世、アリア、テレサの明君出で、イギリスに賢相ビット出でたり。

4 文物

イ、革新文學

即ち十八世紀思潮の特有物にして、中古の遺物たる貴族僧侶の特權を痛罵し、次で王權の擴張と共に一變して平等自由を鼓吹し、王者反抗の氣焰を高めたるものなり。モンテスキュー、ボルテール、ルソー等は其主なる人物なり。

ロ、哲學

中世紀頃一時盛んなりし煩瑣學派は全く跡を絶ち、新たな基礎の下に新たな哲學派起りたり。即ちライブニツカント等の如し。

ハ、科學

一度ビコペルニクスが太陽中心説を唱導するや、科學の研究靡然として起り、大に其旺盛を極めたるものなり。即ちキウビエーが解剖學の祖たる、ラポアジエーが生理學の泰斗たる、ラブラースが天文學の巨伯として將た火雲星説の唱導者たる、ニウートンが引力を發見したる、フランクリンが避雷針

を、ワットが蒸氣機關を、アークライトが紡績機を、シエンナーが種痘法を發見したるが如く、其他枚擧に遑あらず。

ニ、經濟

即ち一七二三年スミスが富國論を著して經濟學に一新生面を開きたるものなり。

ホ、文藝

文學の大家としてはフランスの三大家以外ドイツにレッシング、シルレル、ゲーテの三大戯曲家出で、イギリスにアチソン、ジオンソン、ゴールドスミスの三大散文家現れ、史家としてはヒウーム、ロベルトソン、ギボンあり、畫家にレーノルド、音樂家にモツァルト等何れも後世に名高き者なり。

第四編 近世史

第一章 革命時代

一、フランスの大革命

1 革命の遠因 フランスの革命は少くとも歐洲の近世史上に於ける最大事件にして、其關係する所極めて大、従つて物質的、精神的の兩方面に一大變革を及ぼしたるものなれば、其原因も亦頗る複雑なるものあり。今之を大別すれば大凡そ左の四項に分つを得。

イ、國王の専制

ルイ十四世及びルイ十五世時代に於ける戦争と豪奢との爲めに財政困難を極め、其結果は人民の負擔益々重く、加ふるに政府の冗官多くして統一を缺ぎ行政司法は紊亂し

て官吏の専制となりたるのみならず、ルイ十六世の如きは優柔不斷にして斷乎たる處置を執る能はず。數々王后マリア、アントアネット及び朝臣等の助言に動かされしこと。

ロ、國家經濟の不權衡

土地財産の分配頗る不平均にして、貧富の懸隔甚だしきのみならず、上級人民たる貴族僧侶は賦税軽くして且つ種々の特權あるに反し、下級人民は常に重税賦税に苦しむ、且つ貴族僧侶輩の壓制に苦しむること。

ハ、革命的思想の發達

民主主義を抱けるモンスキュー、ボルテール、ルソー等が唱導せる革新文學の影響が與つて力ありしこと。

ニ、北アメリカ合衆國の獨立

斯る折柄北アメリカ殖民地に於ける人民がイギリスに反して斷然獨立を計りしこと。

2

革命の近因

ルイ十六世即位するや、財政の紊亂を救はんが爲め、チウルゴ、ネツケル、カロヌ等を拔擢して財政整理の任に當らしめしも、常に貴族僧侶等の妨害に遇ひて目的を果さず一七八九年五月にはネツケルの献策に基きて國會を召集せしに、貴族僧侶と平民間に一大衝突起り、平民は分離して別に國民會を組織するに至れり。是に於て政府は武力を用ゐる之を威嚇せしに、暴民忽ち蜂起してバスチーユの獄を破壊し、以て革命の先驅をなせしかば、地方之に應じて頻々暴動起り、爲めに貴族等は身を以て外國に遁走するに至れり。

二、フランス革命の爆發

1

ルイ十六世王の幽閉

バスチーユの暴動起るや、ルイ十六世王はパリを出てベルサイユに至り、頻りに軍人の甘心を求めんと

2

新憲法の發布

ミラポールの歿後改革派は温和共和説を主唱せるジロンド黨と、過激共和説を主張せるジャコベンの二派に分れ

せし折柄、同年十月再び暴動起り、數萬の暴民はベルサイユの王宮を襲ふ。時に王は王后と共に纔かに免れラファイエット將軍擁護の下にパリに歸りしが、間もなくチューレリー王宮に監禁せらるゝに至れり。是に於て改革派は一意國政の改良を企てたりしも一七九一年穩和改革派の首領ミラポールの歿するに及び、世論は又々過激に流れんとせり。時に王は危害の身に及ばんことを恐れ、同年六月にはパリを逃れてメツツ方面に至らんとする途中再び捕へられて宮中に幽閉せらる。此報ヨーロッパ各國に傳はるや、オーストリアはプロシアと同盟してルイ王を援け、以て王權の恢復を圖らんとせり。

後者には有名なるロベスピエール、ダントン、マラー等ありて盛んに過激改革説を唱へ、ルイ王の逃走するや斷然王政を廢して共和政を布かんとせしも、王黨に制せられて果さず、然るに王の再び幽閉せらるゝや遂に王に迫りて新憲法に調印せしめ、一七九一年十月を以て之を發布せり。即ち、貴族僧侶の特權は廢せられ、寺領は沒收せられて地方區劃改まりて自治制設けられたり。

3 立法議會の成立

新憲法發布せられて改革第一歩の緒に就くや、國民會は其任を終れりとして自ら之を解散し、立法議會代つて成立せらる。然るに議員三黨に分れ、互に軋轢を事としたるも就中過激共和主義のジャコベン黨最勢力ありたり。

4 共和政治の成立

然るに、一七九二年遂にオーストリア、プロシアの同盟軍はフランスの國境に迫りぬ。フランス軍之を防ぎ

しも利あらざりしかば人心頗る恟々たり。時にパリの暴民蜂起して、外國軍の侵入を以て國王が敵國に内通せしものとなし、チュレーリーの王宮を襲ふに至れり。是に於て國王は議會に逃れて其保護を求めしも、却て議會の爲めに捕へられ遂に王をタンブルの獄中に幽閉し、次で王黨を悉く虐殺し、同年九月には兵を出して同盟軍を擊破し、勢に乗じて、立法議會を解散し以て再び國民議會を組織し、斷然王政を廢して共和政に代ふることを宣言し、尋で同年十二月議會自ら法廷となりて王の審問を開始し、遂に之を死刑に處し、翌年正月を以て刑の執行を爲せり。

5 保安委員會

ルイ十六世處刑の報、ヨーロッパ各國に傳はるや、オーストリア、プロシアは云ふに及ばず、イギリス、オランダ、イスパニア、スウェーデン等の諸國大同盟軍を起してフラン

スの四境に迫り、國內の勤王黨また一揆を起すに至れり。是に於てジャコベン黨先づ起ち、快刀亂麻過激の戈を以て一舉國敵に當らんとするの覺悟を奮ひ、温和黨たるジロンド黨を仆して國論を一定し、ジャコベン俱樂部と保安委員會を設けて、マラー、ダントン、ロベスピエール等の名士之が委員となり以て國事を議決しカルノー等をして兵を率ゐて同盟軍を各方面に擊破し、尋で國內の反亂を鎮定せり。

6

恐怖時代

斯くして保安委員會の勢力冲天の勢を以て進みしかば、其狂暴は益々甚しく、委員を各地に送りて其政敵を禁囚殺戮せしめ、王后マリア以下千餘人を死刑に處し、以て反対派を屏息せしめ、制度風俗には極端なる手段を用ゐて大改革を施し、キリスト教を嚴禁し、僧侶を廢し、寺院を破る等、過激至らざるな

三、

1

フランス革命の終末と外國侵略

督政官政府の成立

一七九五年新議會は新憲法を制定し、更

かりしかば、國內戰々恟々として恐怖これ事となしたり。既にして流石のジャコベン黨もまた漸くにして其過激に厭き、更に穩和過激の二派に分れて軋轢を事とする間に於て、ロベスピエール獨り巧みに兩者の間を執り、先づ過激派を仆してまたダントンの温和派を虐殺し、斯くして全權を擁し益々暴威を振ひしかば、遂に國民の反抗を受け、健全なる議員等一舉の下に其黨與九十餘名を捕へ、以て悉く死刑に處したりしかば、茲に過激派は自滅の運命を招き、全くジャコベン俱樂部解散せられ、國民曾再び權力を恢復し、全國を震撼せしめたる恐怖時代茲に終を告げたり。時に一七九四年。

めて上下兩院を置き、五人の監督官を任命して國政を執らしめんとす。然れども王黨及び中等社會は之を悦ばずして亂を起し、チユイレリ宮を襲ひたりしかば、ナポレオン、ボナバルト議會の命を受けて之を鎮定す。是に於て新憲法に依りたる政府成り、革命政府の基礎稍確立するに至れるも、新政府は財政の困難を補充せんがためと、革命の氣運を外國に鼓吹せんがため、斷乎として侵略主義を執り、モロー、ジウルダンの二將はドイツに、ナポレオンはイタリヤに各侵入せしめたり。

2 外國侵略

1、第一軍の敗北 即ち第一軍の二將は西南ドイツに攻め入りしも、オーストリア帝の弟たるカロロの爲めに脆くも破られたり。

ロ、イタリヤ征服 然るにナポレオンは一七九六年、北イタリヤに攻め入りて連戦連勝、サルヂニアを降して、チサルピナ、リグリアの二共和國を建設せしめ、更に進んでオーストリア國都ウィーンに逼る。是に於てオーストリア遂に屈し、一七九七年ライン左岸なるベルギー、ロンバルヂアを割讓するに至れり。

ハ、共和國設立 斯くしてフランスの外征はナポレオンの功によりて着々効を奏し、一七九五年にはオランダ先づパタヴィア共和國となり、一七九八年にはローマ法王擒はれてローマ共和國起り、スウイスまたヘルヴエチヤ共和國となり、何れもフランスの保護を受くることゝなれり。

ニ、エジプト遠征 ナポレオンは更に政府の命を受けてイギリス討伐に赴かんとせしが、其海軍力に不完全なるを知り、先づ

エジプトを征してイギリスの商業に大打撃を與へんと欲し、一七九八年には三萬五千の兵と四百餘隻の船艦を率ゐるツローン灣を發して途次マルタ島を占領し、七月にはアレクサンドリア府附近に上陸し、尙進んでカイロ府を陥れ、下エジプトを征服せしに、會々其艦隊がアプキール灣内の海戦に於てイギリス海軍の提督ネルソンの爲めに殲滅せられしかば、遂に目的を達せずしてエジプトを退くに至れり。

3

統領政治 一七九九年、ヨーロッパ各國はイギリスの主唱に依りて對佛大同盟を組織し、頻りにフランス軍を破る。時に督政官政府また威信地に墜ちて形勢頗る危し。ナポレオン乃ちエジプトにありて之を聞き、同年十月急に歸國し、一舉武力を以て時の政府を倒し國會を解散して統領政府を組織し、三人の統領

四、

を置きて國政を處理し、自ら第一統領となりて國權を掌握せり
ナポレオン一世の覇業

1

オーストリア征討 ナポレオン統領政治を組織して一段落を告げしと雖、イギリス、オーストリア等は之を承認せずして反抗の態度に出でしかば、先づオーストリアを征討せんとして、自ら兵に將となりてサン、ベルナルドの嶮を越えてイタリアに入り、大にオーストリア軍を破り、ドイツもまた別に派遣せられたるモロ一に大に勝ちしかば、一八〇一年オーストリア遂に屈し、リウネビールの和約に依りてライン左岸を悉くフランスに讓ることとなりぬ。

2

アミアン和約 時にイギリスも連年の戦役に依りて財政大に困難に陥り國債五億ポンドに上りしかば、平和論大に起り、加之

名相ピットまた辭職したるが故に、一八〇二年アミアンに條約を結び、以てトリニダーン及びセイロンの外悉くその克得し土地を返還せり。

3 ナポレオンの内治

イギリスとの和議成るや、専ら心を内治に用ゐ、タレーラン、カルノー以下の人材を登用し、カトリック教を復して國教となし、學政を刷新し行政を敏活にし財政を整理して有名なるナポレオン法典を編纂せしめ、着々改良進歩の新政を布きたりしかば、革命の慘劇に懲り、舊時の弊政復活を恐れたるフランス人民大に之を歓迎し、威望益々高まりたり。

4 帝位に即く

斯くして一八〇二年には遂に國民一般の投票に依り、終身統領に選舉せられ、次で一八〇四年には遂に帝位に即き、ナポレオン一世と稱し、翌年はイタリアの北部大半を併せて

イタリア王の號をも兼ね稱するに至りぬ。

5 對佛同盟の成立

一八〇三年イギリスはアミアンの條約を履行せざるのみならず、オーストリア、ロシア、スウェーデン等と結んで對フランス大同盟を作れり。

6 トラファルガルの海戦

ナポレオン是を聞きて大に怒り、機を得てイギリス討伐を實行せんとする折柄、一八〇五年イギリスの提督ネルソンはイスパニア、フランスの聯合艦隊をトラファルガル附近に粉碎し、以て海上の權力を完全にイギリスの手中に収めたり。

7 アウステルリツクの戦

一方海上に敗北したると雖、此年ナポレオンは自ら兵を率ゐてアウステルリツクにオーストリア、ロシアの聯合軍を破り、以てベネチア地方を奪ひたり。

8 ライン同盟成立

一八〇六年にはナポリを取りて兄ヨセフに與へ、バタビア共和國を變じてオランダ國となし、弟ルイスを封じて其王となし、同年遂にライン地方のドイツ聯邦を合從せしめてライン同盟を作らしめ、己れ其保護者となりぬ。

9 神聖ローマ帝國の滅亡

是に於て聯邦の過半は之に加盟しければ、ドイツの統一全く破壊せられ、フランシス二世帝も遂に敵せずして神聖ローマ帝國の解散を公布するに至り、自らオーストリア皇帝の位に踐み止まれり。

10 プロシア征伐

プロシアは曩に一七九五年一旦フランスと和してよりは久しくヨーロッパの戦亂を傍觀せしが、一八〇六年遂に忍びず、ロシアと同盟してフランスと開戦す。然れども一戦忽ち大敗をおき、翌年チルジット條約に依り、僅かに莫大の償金と

領地の半を割讓して和を乞へり。

11 チルシット條約

斯くしてナポレオンはプロシア東北の地を以てワルシアア公國を作り、サクソニア王を以て其公となし、又其西部とヒブラウンシウワイヒ、ヘッセン等を併せてウエストフアリア王國を作り、弟ジエロームを之が王に封じたり。

12 ロシアと默契

而して一方ロシア帝アレキサンデルに媚びて力を西歐に注がざらしめんと欲し、盛んに其東方(アジア)經營を勸奨し、且つイギリスに對抗すべき默契を結びたり。

13 大陸條例の發布

ナポレオン、プロシア軍を撃破するや、大陸條例を發布して、ヨーロッパ大陸の諸國とイギリスとの通商貿易を嚴禁し、以て坐ながらイギリスを疲弊せしめんとせり。而して其勢力範圍の各國は勿論之が遵守を命じたるも、ロシア、プロシ

アにはチルジット條約に依りて同意せしめ、デンマークには強迫して之を諾せしめたり。

14

ポルトガル及イスパニア征伐 然るにポルトガルは獨り是の條例を奉せざりしかば、直ちに兵を遣して之を占領し、同時にイスパニア王フェルデナンド七世父子に迫りて位をナポリ王ヨセフに譲らしめ、妹婿ミウラーをナポリ王となしぬ。時に一八〇八年既にしてイギリス軍虛を窺ひてポルトガル國に上陸し一擧フランス兵を撃退し、進みてイスパニアに入りしかば、ナポレオン馳せて之に赴き、イギリス軍を驅逐して歸國す。

15

オーストリアの再征 然るにオーストリアこの隙に乗じて反抗を計りしかば、恰も歸國したるナポレオン直ちに之を破り、一八〇九年ウイーン和議を結びて地を割かしめ、大陸條例に加入せし

めたり。

16

ナポレオンの全盛 ウイーン條約の翌年皇后ヨセフ、イナを廢して、オーストリアの皇女マリア、ルイザを娶り、同年スウエーデンと和して大陸條例に加入せしめ、オランダ王ルイスの辭退するや其地方を直轄とし、翌年には一男子を擧げるなど、其版圖は北、バルト海岸より、南はイタリアの大部に跨り、實にナポレオン全盛を極めたるものにして、以て一八一二年に至れり。

五、

1

ヨーロッパ獨立の役 (ナポレオンの失勢)

失勢の原由 ナポレオンは斯の如くにして、歐洲の盟主と仰がれ、舊弊を除き新政を布き民益を起せること尠からざりしが、反面に於ては其餘りに兵を用ゐ連年の戦争は兵力を滅殺せしめたと、大陸條例發布の結果諸國の商工業急に衰頽して反抗不平の

聲を高めしめたるを、併吞せる地方に對し歴史習慣を無視して新政を布きたる等が原因となり、遂に一大反動起り、各國の獨立戰爭を現出するに至れり。

2 イスバニア人起る 斯る感情に一度び支配せられたる各國人は先づイスバニア人を先登として蜂起せしめ、大にフランス軍を苦しめて頑強なる抵抗をなさしめ、イギリスまたウエリントンを遣して之を助けしむ。

3 モスクバの大敗 斯る間にロシアは大陸條例が自國に不利なるを見て之を履行せず、陰にイギリスと通商せしかば、一八一二年五月ナポレオンは五十萬の大軍を率ゐてロシア遠征の師を起し九月國都モスクバを陥れしも、偶々ロシア軍の逆撃と共に火起り全府焼失したるに加へ、流石フランスの大軍も饑寒に苦しむ、終

に大潰走となり、死者三十餘萬に及べり。而してナポレオンは纔かに身を以て免れたりとぞ。

4 ライプツヒの激戦 是に於て此報を聞きたる各國は、一齊に群起して又々對佛大同盟を作り、一八一三年には大にナポレオンをライプツヒに破り、翌年にはフランスの境に入りてパリを陥れたり。

5 ナポレオンの王位と配流 是に於て一八一四年四月遂にナポレオンをして帝位を辭せしめ、地中海の一孤島たるエルバに退かしむ。而してルイ十六世の弟ルイ十八世迎へられて王位に即き、以て王政復古す。

六、ウイーン列國會議

1 ウイーン會議 一八一四年九月オーストリアの都ウイーンに

於てオーストリア、ロシア、イギリス、プロシア、フランス以下各國の代表者集合して列國會議を開き、以て歐洲戰亂後の善後處分を議す。然るに各國の意見衝突して議容易に決せず。戰雲再び暗曇たり。

2

ナポレオンの再舉 しかのみならずフランスに於てはルイ十八世專制政治を行ひて大に人望を失ひ、人民は再びナポレオンを追慕するものあり。ナポレオン乃ちエルバ島にあつて此形勢を聞き、一八一五年三月密かにエルバを脱してフランスの南岸に上陸す。人民歡呼して之を迎へ、忽ちパリに入りて再び皇位に即く。ルイ十八世はイギリスに奔りしが、報ウインの列國使臣に達するや大に驚き、直ちに大同盟軍を起してイギリスの將ウエリントン總指揮官となりて之を撃ち、ワーテルローの戦ひには遂にフラン

ス軍を粉碎す。

3

ナポレオンの末路 是に於てナポレオンは一敗地に塗れまた起つ能はず、パリに歸りてアメリカに逃れんとせしも果さず、同盟軍に捕へられてセントヘレナ島に流され、イギリス官吏監督の下に不快なる生活を送ること數年、遂に一八二一年五月病を以て空しく稀世の英雄は憤死せり。時に享年五十二歳、フランスは此役に於て償金を課せられ、各國戍兵の駐在する所となれり。

4

ウイーン會議の結果 ウイーン列國會議はナポレオンの再舉と共に一時中止せられしが、一八一五年六月漸く議事を終り、各國使臣の調印成る。全文は百廿一條にして、其大要左の如し。
 (一) イギリスはフランス、オランダ植民地の一部とマルタ島を得ること。
 (二) プロシアはサクソニアの半部、ポメラニア、ウ

エストニア、ライオン諸州を得ること。(三) オーストリアはベネチア、イルリアを恢復すること。(四) ロシアはワルシニア公國をポーランド王國として其王位を兼ねること。(五) オランダはオーストリア領ネーデルラントを得て王國となすこと。(六) スウェーデンはノウルエーを得ること。(七) スイスは永久中立の聯邦となすこと。(八) イスパニア、サルヂニア、モデナ、ナポリ、法王領は舊主に返還すること。(九) ドイツ聯邦の組織成りて(三十九州及び四自由市より)オーストリア其聯邦議會を總轄すること。

第二章 各國統一時代

七、神聖同盟

1 神聖同盟の成立 バリー陥落後、一八一五年九月ロシア帝ア

レクサンドル一世の首唱により、キリスト教の神聖なる主義に基き神聖同盟を結び、以てイギリス、ローマ法王、トルコを除きたるヨーロッパの諸國を加盟せしむ。即ちヨーロッパの平和を維持し且つ宗教保護の目的にありしと雖、内實は各國君主の權勢を保護し、民權自由の抑制にありき。而して其實權はオーストリアの宰相メツテルニヒの握る所なり。

2

メツテルニヒの自由主義抑壓政策 即ち神聖同盟を成立せしめたる宰相にして、各國が之に習ひたる所以なり。

イ、オーストリア メツテルニヒが宰相となりしは一八〇九年以來にして、外交に長じたる手腕はよくウィーン會議を成効せしめしが、フランス革命以來オーストリアも其影響を蒙り、較もすれば自由主義唱道せられんとするの傾向あるを見、此際斷

然之が壓迫を圖り以て極端なる鎖國主義を執らんとし、探偵を放つて檢閲を嚴にし、悉く新思想の流入を禁じたるものなり。是に於て漸次イタリヤ其他の國々にも盛んに之が手段を試みるに至れり。

ロ、ドイツ　ドイツに於ても嘗て軍功ありし軍人等が盛んに自由主義を唱へ、殊にイエナ大學生は青年組、体育會等種々の団体、結社を設け自由主義伸張、ドイツ統一を叫び、一八一七年のルーテル三百年祭、ライプチヒ大捷紀念祭舉行等に際し、政府の保守主義を非難したりしかば、メツテルニヒ乃ち干涉して聯邦會議を開き、一八一九年カルルスバード決議を發して學生を禁錮し、結社を解散せしめ、以て言論の抑壓を計り改革運動を根本的に鎮壓したり。

ハ、イスパニア　一八二〇年イスパニアに一揆起り、フェルヂナンド王に逼りて憲法を再興せしめしも、神聖同盟は忽ち兵力干涉を試みて舊態に復せしめたり。

ニ、ポルトガル　一八〇七年ナポレオンの軍を避けてブラジルに逃れたるポルトガル王は、ウィーン會議後と雖尙歸國せず、ポルトガルとブラジルを合衆國たらしめんと試みしかば、一八二〇年國民は反旗を擧げて憲法を作り、其後歸國したる國王に該憲法の遵奉を誓はしむ。然るに保守黨はイスパニアの自由主義を鎮壓したるフランス兵力の援けを借り、武力を以て遂に憲法の廢止を斷行す。

ホ、イタリヤ　イタリヤはウィーン會議の結果數邦に分割せられ、各領主悉く專制政治を行ひしかば、志士等はカルボナリな

る秘密結社を組織し、以て全國の統一を企てしも、會々イスパニアに改革運動起りたるを聞き、先づシチリア王國の志士起ちて王に迫り、以て憲法を發布せしめたり。然れどもメツテルニヒの爲め忽ち兵力を以て鎮壓せらる。

ヘ、フランス フランスは大亂後又々保守黨盛んに跋扈したりしかば、ルイ十八世王は民心再び激動して革命運動の起らんことを恐れ、一八一六年議會を解散して内閣を更迭し、以て温和主義を行ひしかば、當分は何等の騷擾を起さざりき。然れども外國に向つては神聖同盟に加入し以て他國の自由主義運動に反對せり。

ト、イギリス イギリスは外交上神聖同盟には加入せざりしも其政略には賛同して集會條例、出版條例を發布して過激の舉を

嚴壓したり。

八、アメリカ諸邦の獨立

1 獨立の動機

イ、西葡の殖民地 コロンブスが一度び新大陸發見以來、イスパニア、ポルトガルは盛んに其殖民政策を獎勵せしかば、南北アメリカに於ける領土は極めて廣大なるものなりしが、其後漸次本國は常に其利益を壟斷して殖民の繁昌を阻害せしと、ナポレオン有勢時代以來本國の勢力衰へたると、イギリスの政策變化せしと、北米合衆衆國のモンロー主義とのため、漸次獨立したるものなり。

ロ、神聖同盟 アメリカ各國が着々獨立するや、ヨーロッパの神聖同盟は之を以て革命運動の一なりとなし、兵力に訴へて之

が抑壓を試みんとせしに、時恰もイギリスが政策を變化せしと
アメリカ合衆國大統領モンローの主義に妨げられて果すを得ざ
りき。

ハ、イギリスの政策變化　イギリスは初めヨーロッパの神聖同
盟に賛同せしも、其後國民の不平を招きしが、一八二〇年ジョ
ージ四世即位するや、カニング其外交の局に當りしかば、全然
從來の政策を一變して自由主義を保護し、進んでアメリカ諸國
の獨立を承認し、以てメツテルニヒの壓制政畧に一大打撃を加
へたり。

ニ、モンロー主義　當時アメリカ合衆國は自國の獨立に鑑み、
率先獨立の壯舉を賛成したるが、殊に其第五大統領ジェームス
モンローは神聖同盟がアメリカ諸國獨立に干涉せんとするを飽

2 諸國の獨立

く迄反對し、一八二三年十月には教書を發して、之が態度を明
かにしたり。故に遠がのメツテルニヒ等も如何ともなす能はず
事乃ち止む。是れ即ちモンロー主義にして爾來十九世紀の終り
に至る迄アメリカ合衆國外交主義となれるものなり。

イ、ベネズエラ　即ち一八一七年、チリと共に獨立の先驅をな
す。

ロ、チリ　同年サン、マルチン兵を擧げてイスパニア人を破り
以て獨立せり。

ハ、ブラジル　一八〇四年、ポルトガル王ジョアン六世、ナポ
レオンを避けて逃れ來れる以來急に發達したるものなりしが、
後ち王の本國に歸りしより、國人は一擧起ちて太子ペテロを戴

き、以て一八二五年獨立帝國となれり。

ニ、メキシコ 叛亂起りしがため、イスパニア本國は將軍イツルビデを遣して鎮定せしめんとしたりしに、却て將軍叛徒の首領となり以て一八二九年獨立して共和國となる。

ホ、ポリビア 一八二四年獨立共和國となる。

ヘ、ペルー 一八二六年獨立す。

ト、其他 プエノス、アイレス、バラグアイ、ウルグアイの諸國はヨセフ、イスパニア王となりしより斷然背きて獨立し、ノバ、グラナダ、エクアドル、ポリビアの諸國も概ね一八一七年乃至一八二五年の間に何れも獨立したるものなり。

九、ギリシアの獨立

1 ギリシアの反

ギリシア人もまた自由思想の影響を受け、ト

ルコの苛政、回教の束縛に堪えず、一八二〇年遂に叛亂を起す。時にヨーロッパ諸國はギリシアが古代文化の源泉なると、同宗教たるギリシア人が異教徒に苦しめらるゝを同情し、軍資を支給するもの多く、イギリスの詩人バイロンの如きは自ら劔を帯びて獨立軍を援けたり。然れどもエジプトの大守メヘメット、アリ、トルコを援けしにより一時獨立軍疾く撃破せらる。

2 獨立完成

時にニコラ一世ロシアに君臨して、イギリス、フランスと共にギリシア保護の同盟を結び、一八二七年同盟艦隊はトルコ艦隊をナバリノに破り、ロシアの陸軍またトルコに侵入せしかば、一八二九年遂にトルコはアドリアノブルの和約に於てギリシアの獨立を承認し、ギリシアはバワリアの王子オットを迎立して國王となしぬ。

一〇、七月革命

1 原因 一八二四年フランス王ルイ十八世歿して弟カロロ十世位に即く。然るに性驕暴にして思慮乏しく專制政治を恢復せんとせしかば屢々國民の反抗を招きたり。

2 革命の破裂 一八三〇年三月、カロロ王國會に臨みて國王の特權を憲法より重しとなせしかば議員の反抗を招く。是に於て王は國會を解散し更に總選舉を行ひしも依然反對黨の議員多數なりしを以て、王は憲法第十四條によつて同年七月未だ召集せざる議會を解散し、選舉法を改正して出版の自由を制限せしかば、パリ一の暴民忽ち蜂起して王宮を圍む。王乃ちイギリスに逃れしを以て、國民はオルレアン公ルイ、フィリポを迎へて王位に即かしむ之を七月革命と云ふ。

一一、七月革命の影響

1 ベルギーの獨立 舊オーストリア領ネーデルランドは、ウイーン列國會議以後オランダと合同したれども、民性國情の相容れざるものありしに加へ、政府の官職は専らオランダ人の手に歸せしかば相互の軋轢日々に甚しかりき。是に於てフランス革命の影響を蒙り、八月末にはブルツセルに獨立運動起り、オランダ軍を撃退せしを以て、イギリス、フランス、ロシア、オーストリア、プロシアの大使はロンドン會してヨーロッパ平和を維持せんがため、ネーデルランドの獨立を承認したり。是をベルギー王國と稱す。

2 ポーランドの叛亂 ベルギー獨立の報、ポーランドに至るや國人亦叛亂を企て、同年十一月にはワルシアワに暴動起り、先づ

新政府を立て、其勢盛んなりしも國民の團結鞏固ならず、將士内に相反目したりしかば、忽ちロシア軍の乘ずる所となりて翌年九月には早くもワルシアワ陥り、尋で叛亂平ぐ。是に於てロシアはポーランドの憲法を中止して特別行政を廢止し、純然たる屬領地と見做すに至れり。

3 イタリアの動亂

イタリア人も亦七月革命の影響に依て、自由、統一の聲再び處々に起り、法王の權力を全滅せしめんとせしが、間もなくオーストリアより兵を出して之を鎮定せり。

4 スウイスの動搖

スウイスはウイーン會議の結果、二十一州の聯邦より成りしと雖、個々獨立の有様を呈し、國內一時動搖せしが、一八三一年聯邦會議を開きて民主政治を斷行することを議決して事止む。

5 ドイツの動搖

ドイツにも革命熱波及してヘブランズウィクヘツセ、カッセル、サクソニア等に於て革命運動起りしが、何れも憲法發布又は其改正を爲して鎮靜に歸せり。

二、ドイツの關稅同盟とイギリスの改革

1 ドイツの關稅同盟

一八一八年以來プロシア卒先して北ドイツ諸國に計り關稅同盟を組織して内地の關稅を廢し、且つ國境關稅を一定して經濟上ドイツの統一を計り、一八三四年には南ドイツの諸邦も悉く之に加盟したるが故に、プロシアの勢漸くオーストリアを壓せんとするの傾向現出せり。

2 イギリスの改革

イギリスにてはカニング死せる後ウエリントン公のトリー黨内閣大に守舊に傾きしも、當時の輿論は極めて進歩的にして、カブデン、ブライトの徒穀物令廢止協會を組織

して穀物輸入税全廢を主張し、越へて一八二九年には舊教徒宥釋法案を通過せしめて舊教信徒と雖、官吏及び議員たる權を得たり次ぎて選舉法改正論大に起りしも時のウエリントン内閣極力之に反對せしが、一八三〇年の總選舉に際し遂に改革黨多數を占め、内閣の不信任を決議したりしかば、トーリー黨内閣仆れてラッセルバーマストン等のホイグ黨内閣起り、一八三二年には選舉區改正法案通過して、新興の市府に議員選出權を與へ、政黨内閣の端を確定して君民同治制を完備せしむ。

一三、東方問題

1 起因 事はトルコ、エジプトの戦亂に基くものなり。是より先トルコは内政紊亂、國勢衰微の極に達し、早晚分割せらるべき運命に瀕しつゝありしも、其領地は小アジア、エジプトに跨りし

かば、ヨーロッパの列國悉く其利害關係を異にす。即ちイギリスは領地インドの通路に當りしが故に成るべくんば其安全を希ひ、フランスはエジプトを保護してアフリカに勢力を伸べんと欲し、ロシアはペテロ大帝以來の侵略主義を實行せんとし、オーストリアは其領土をバルガン半島に擴めんとしつゝあるが如し。

2 メヘメットの叛亂

イ、其謀叛 エジプトの大守メヘメット、アリはギリシア獨立戦役にトルコを援け、功によりてクレテ、キプロス二島を得しも、尙満足せず列強が七月革命の餘波に熱中するを好機となし其子イブラヒムをダマスクの大守にせんことを求む。トルコ帝マームード二世之を拒斥しるを以て、アリは直ちにシリアに侵入し、トルコ軍を潰亂せしめて長驅國都に逼らんとす。

ロ、ロシアの干渉 是に於てロシアはトルコ救援を名としてダ
ルダネル海峽を扼せんとしたりしかば、イギリス、フランスの
二國大に驚きて之に干渉し、トルコに勸めてシリア、アダナを
エジプトに割きて以て媾和せしむ。

ハ、露土の密約 是に於てロシアの計畫失敗に歸せしも、更に
トルコに迫り八年間の攻守同盟密約を結び、他國艦隊のダルダ
ネル通航を禁せしむ。是をウンキアルスケレシー條約といふ。
ニ、イギリス出兵 然るにメヘメット又々謀叛してペルシア灣
紅海を占領してイギリス東方貿易を妨害せんとしたり。よりて
一八三九年イギリスは急に出兵してアデンを占領しトルコ帝に
勸めてエジプトと開戦せしむ。

ホ、トルコ軍敗る 然るにトルコ軍はシリアに大敗し、マーム

ード帝また殞落したりしかば、トルコ艦隊の全部はエジプトに
降伏し、トルコの危急愈々迫りたり。

ヘ、四國同盟 是に於てロシアは前約を履行せんとしたりしも
オーストリアの爲めに妨げられ、フランスはエジプトを助けん
とする氣勢を示せしかば、一八四〇年ロシア、オーストリア、
プロシア、イギリスの使臣はロンドンに會して同盟を組織し、
一旦はメヘメットに勸降せしも聞かず。是に於て同盟艦隊はシ
リアを占領し、進みてアレキサンドリアを封鎖せしかば、メヘ
メット遂に降伏し、シリアの太守を棄て、エジプトの大守のみ
となり、以て事落着す、時に一八四一年。

一四、二月革命

1 原因 フランスはルイ、フィリポ即位するや、其當初は憲法

を遵奉し自由主義を行ふべきを誓ひしも、其後内治外交共に失敗し、内は政黨の争ひあり、外にはエジプト、イスパニアに對して國威を損せしかば、遂に國民の反抗心を買ひ、大内亂を惹起するに至れり。

2

革命の破裂 一八四二年二月フランス民間の諸黨パリに集會せんとしたりしに、政府之に干渉して禁止を命ぜしかば、人民怒りて暴動を起し、混亂三日に亘りて遂にチュールー王宮を陥る。是に於てフイリポ王はイギリスに逃れたり。二月革命是なり

3

共和政治の成立 改革黨は直ちに假政府を設け新憲法を定め共和政治を宣言し、任期四年の大統領を選んで之に行政權を委ぬることなし、同年十二月ナポレオン一世の甥、ルイ、ナポレオン選ばれて大統領となれり。

一五、二月革命の影響

1

オーストリア オーストリアは曩きに一度びはメツテルニヒの抑壓主義に依り、一時平和を維持せしも、時々の變遷は二月革命の報と共に又々破裂し、不平黨等は大学生と共に自由主義を唱道し大に騷擾を極めしかば、メツテルニヒは宰相は辭してイギリスに走り、皇帝フェルヂナンドも位をヨセフに禪り、一時獨立せんとしたるホンガリアもロシアの援兵到達して直ちに破られ、以て漸く事落着す。

2

ドイツ ドイツも二月革命の報を聞くや、國民奮起して又々暴動を始めしかば、プロシア王フレデリキ、ウイレルム四世は憲法政治實行を爲して其第一聯邦會議をフランクフルトに開き、大にドイツ統一を唱へしも、當時尙ほオーストリア帝聯邦の首班に

ありしを以て統一の事業成らざりき。

3 イタリア 是より先サルヂニア王カロロ、アルベルトはイタリア溫和黨の人望を得て密かに其統一を志せしに、恰も二月革命の報傳はると共に北部イタリアの諸州獨立を圖りしかば、之を好機として遂にオーストリアに宣戦し、諸國軍の援助を借りしも、一八四九年遂にノバラの激戦に大敗し、王位をネエマヌエロに禪りて退隱したり。

一六、ナポレオン三世

1 フランスの第二共和政治 ナポレオン大統領に選ばれてフランス第二の共和政治成立するや、ナポレオンは其職權を利用して軍隊及び行政の長官には悉く自黨の人を擧げ、また伯父一世帝の偉業を稱揚して國民の感情を動かし、法王に媚びて僧侶の歡心を

買ひ、已れ人民の保護者たる觀を示し以て民心を收め、一八五一年十二月には突然反對黨の名士を捕縛して兵力を以てパリーの一揆を鎮壓し、新憲法を草して全國民大多數の賛同を得たり。

2 皇位に即く 斯くして民心を收めたるナポレオンは後ち一年即ち一八五二年十二月三日を以て大多數國民の投票に依り、公然帝政の成立を告げ、帝位に登つてナポレオン三世と稱するに至りぬ。

3 其志望 斯くして先づ其志を達せしかば、熱心國內の秩序恢復を圖り、伯父一世帝の偉業に倣ひ外戦に赫々たる功績を擧げ、以て人心を満足せしむる必要を感じ、遂にクリム戦役、イタリア獨立戦争に參與するに至りぬ。

一七、クリム戦役

1

原因

ロシアはニコラ一世帝登極するや、専心ペテロ大帝の遺志を遂げんと欲し、トルコ國內の紛擾を機としてイギリスに其分割を提議したるも拒斥せらる。偶々聖地保護權に就き、ギリシアとローマの兩正教互に相争ひしに、フランス帝は舊教徒の歡心を得んとしてトルコ帝に談じ、聖地保護權を擧げてローマ、カトリック教徒の手に收めしむ。是に於てロシア帝大に怒り、ギリシア正教徒の保護を名としてトルコに宣戰するに至りぬ。

2

英佛の聯合軍

是より先フランスはイギリスと同盟してトルコ援助を決議し、一八五四年を以てロシアに宣戰し、其聯合軍はエウバトリアに上陸し、アルマにロシアの提督メンシコフを破り長驅セバストポルの要塞を包圍したり。

3

セバストポルの包圍戰

時にニコラ一世歿してアレキサンド

ル二世立つと共に和議を結ばんとせしも成らず。是に於て帝は更にドートレーベンをしてメンシコフを助けしめ益々其防備に力めしかば、聯合軍は寒氣と糧食缺乏に加へ一層の苦戰に陥りたり。時にサルチニア王エマヌエはイタリア統一を期して兩國の歡心を買はんと欲し、聯合軍に同盟して出兵援助せしかば包圍軍の士氣爲めに振ひ、九月八日總攻撃を開始して翌日遂に之を陥る。實に包圍開始より三百二十八日を費したりといふ。

4

パリ條約

是に於て一八五六年、イギリス、フランス、ロシア、トルコ、サルチニア、オーストリア、プロシアの七國使臣はパリに會して平和條約を締結す。其要項左の如し。

- (一) 列國はトルコの獨立を保障し、内政を改革せしむること。
- (二) 黒海を中立地として各國軍艦の通航を禁ずること。
- (三)

ロシアはドナウ河口の地を放抛すること。(四) トルコ國內のキリスト教徒は回教徒と共に身体財産の安全と信教の自由を許すこと。

一八、赤十字の起源

クリム戦役に於て激戦年を越ゆると共に悪疫また大に流行し、傷病者海陸に満ちて其呻吟の狀轉た凄慘を極むると雖誰あつて能く之を收むるものなし。時にイギリスの貴婦人フロレンチア、ナイチンゲール同志の婦人を率ゐて戦地に赴き、傷病者の看護に従事して博愛の精神を發揮す。是れ赤十字社の起源たり。

一九、イタリア統一

1 統一の機運とエマヌエル
イタリアは曩きに獨立統一の氣運一度び挫かれしと雖、會々サルヂニア王に英邁なるビクトリオ、

エマヌエル出で、加ふるに賢相カブールの之を輔けるあり、頻りにイタリア統一の業を企て機を見て再び事を擧げんとせり。

2 ナポレオン三世
時にナポレオン三世はクリム戦役に偉功を奏し、さなくとも野心満々たる際なりしかば、イタリア獨立運動の氣運高まれるを見て、私かにフランス保護の下に獨立せしめんと欲し、一八五八年七月遂にカブールと秘密同盟を結び、以てオーストリアを激せしむる方策を企てぬ。

3 サルヂニアの開戦
オーストリアは其内情を知り、一八五九年遂に大擧してロンバルヂアに入る。乃ちナポレオン大軍を率ゐてイタリアに入り、サルヂニアを援けて大にオーストリア軍を破る。偶々プロシアがオーストリアを援けんとせしかば、ナポレオン急におーストリアとピラフランカに會して和議を結び、次でチ

ヴーリヒに本條約を締結せり。

4 チューリヒ條約 要領左の如し。

(一) オーストリアはロンバルディアをフランスに與へ次で之をサルヂニアに讓ること。(二) モデナ、パルマ、トスカナ、法王領等を各舊主に還附すること。(三) イタリア聯邦を組織してローマ法王を其盟主とすること。

5 イタリア王國 然るにエマヌエロ王は此條約を憚ばず、カプ

ールをしてナポレオンと商議せしめ、中部イタリアを合併してイタリア王國を建て、其代償として、ニース、サボヤをフランスに割讓せり。

6 統一の完成 一八六〇年、ガリバルヂは義勇兵を率ゐてシチ

リア全島を攻奪し、更にナポリを降陥し共にサルヂニア王を推戴

二〇、 北アメリカ合衆國と其南北戦争

せしめ、以て北方ベネチアと中部ローマ附近を除くの外悉くサルヂニア領としたり。其後一八七〇年、フランスはプロシアと交戦し、ローマの守備兵を撤したるが故に、エマヌエロ王急に起ちて之を占領し、遂に都をフィレンツェよりローマに移して以てイタリア統一の業を完成せり。

1 版圖の膨脹 北アメリカ合衆國は一八〇三年獨立の業を完成

してより國勢驍々として進み、ミシシッピ河以東の地をイギリスより割取して版圖を擴めしより後、一八〇三年にはフランスよりルイジニアを、一八一九年にはイスパニアよりフロリダを購入して益々版圖擴張す。

2 メキシコ戦争 其後西南部のテキサス州をメキシコより買収

せんと欲し、其州民之を希望せしに反し、メキシコ政府之に應せざりしより兩國の戦争となり、結局一八四八年の和議に依てテキサス州の外ニユーメキシコとカリフォルニアの兩地を併せ合衆國に收めたり。

3 南北戦争の原因

元來南部諸州は風土氣候良好なるを以て奴隸を驅使して穀物、綿等の耕作に勉め、北部諸州は氣候寒冷土地不毛なるが故に専ら製造工業に従事し、自由労働者を用ゐたるが故に南部諸州の奴隸使役を以て天理に背くとなし其廢止を唱へて止まず、加ふるに政治上に於ても北部は鞏固なる共和的中央集權制を望み、南部は純然たる民主的共和主義を抱きしかば、常に相反目衝突し、數十年の久しきに亘りて論争止まざりき。

4 南北戦役

一八六〇年遂に奴隸廢止主義たるレバブリカン黨

反對派たるデモクラット黨を壓して其首領アブラハム、リンカトンを選ばれて大統領となる。是に於て南カロリナ州先づ合衆國より分離し、翌年にはミシシッピ以下の十州之に倣ひ、別にアメリカ聯邦を組織して政府をリチモンドに置き、ジェツファアーンソン、デービスを大統領に選びたり。是に於て一八六一年四月遂に南北戦争起り、初めは南部の勢強く一時はウォシントン危かりしも、一八六三年奴隸廢止令北部に發布せらるゝや形勢俄かに一變し、一八六五年を以て北部の將格蘭ド南部の都リチモンドを陥るゝに及び、南部諸州相次ぎ降り戦亂漸く平定す。

5 結果

是に於て憲法を改正し、奴隸廢止を公布して黑人にも選舉權を與へしが、一八六五年大統領リンカーン弒殺せられしかば、副統領ジョンソン大統領となり、専ら戦後の經營に従事して

當初の計畫を完成したり。

二二、メキシコ、フランスの交渉

1 メキシコ事件 一八六一年メキシコ政府は爾後一ケ年間一切外債の償却を中止する旨宣言せしかば、イギリス、フランス、イスパニアの三國はロンドンに會議してメキシコ遠征を決す。乃ち同年十二月兵を送り、翌年二月メキシコ政府をして償金を出し、外債を償還する旨誓はしめてイギリス、イスパニアの二國は兵を還す。

2 ナポレオン三世の野心 時にフランスは兵を留めて合衆國が南北戦争の内亂に乗じ、メキシコを征服してラテン民族の勢力を擴張せんと欲し、一八六二年首府メキシコを陥れ共和政治を廢して帝國を建て、オーストリア皇弟マキシミアンを迎へて帝位に

即かしむ。然るに國人服せず、加之合衆國の内亂も止みてフランスの干渉を悦ばず、頻りにモンロー主義を主張して強硬の態度を執りしかば、ナポレオン遂に屈して一八六七年兵を撤し、皇帝も敗れて國民に擒にせられ後ち銃殺に處せらる。是に於てナポレオンの野心全く敗れ名聲大に衰ふ。

二三、シウレスウイヒ、ホルスタイン事件

1 ウイルレム一世の即位 一八六一年プロシアはウイルレム一世位に即き、ビスマルクを擧げて宰相となし、ローンを陸相に任じ、深く時勢に鑑み、頑硬なる議會の反抗にも屈せず、軍制を鞏め、軍備を擴張し以てドイツ統一の素志を貫かんとせり。

2 ホルスタイン問題 一八六三年デンマルク王フレデリキ七世歿して嗣なかりしかば、グリユツクスベルヒ公クリスチャン九世

入つて即位し、シウレスウイヒをデンマルクに合併する憲法を承認せしかば、プロシア、オーストリアの兩國は協同して之が廢止を勧む、然れども王の拒みし爲め遂に兩國は兵を出して討伐を始む。

3 **デンマルク戦争** 一八六四年兩國聯合軍は進んでデンマルクを侵し、連戦連勝の勢を以て進撃せしかば、デンマルク王止むなく和議を求め、シウレスウイヒ、ホルスタンの兩州とラウエンブルグを兩國に割譲す。

4 **結果** 是に於て兩國は之が分割に就て相論争し、遂に一八六五年八月ガスタイン條約を以てプロシアはシウレスウイヒを、オーストリアはホルスタインを各治むることゝなれり。

三三、プロシア、オーストリア戦役

1 **原因** プロシアは早くより新進氣鋭の勢を以てドイツ聯邦の牛耳を執らんとし、オーストリアは舊來の勢力に依りて其覇權を讓らざらんとし、以て兩國相争ひ居たりしが、是より先一八六三年オーストリア皇帝フランシス、ヨセフはドイツ聯邦會議をマイン河畔のフランクフルトに召集したりしにプロシア王はビスマルクの策に依て之に出席せず、加ふるに其決議案には強硬の反抗を試みてオーストリアの計畫を無効に終らしめ以て益々反目の氣勢を高めしが、ホルスタイン問題に依り愈オーストリアの嫉視を招き、遂に聯邦會議を開きてガスタイン條約を破棄し、改めてデンマルクの割きたる兩州を獨立國となし、以てドイツ聯邦に入らしめんとす。プロシア乃ち極力反抗して兩國の衝突爰に始まりたり

2 **戦役** 一八六六年六月遂に兩國は宣戰を公布し、フランスは

中立を宣言してイタリア、プロシアと同盟す。乃ちプロシアは將軍モルトケ三十餘萬の精銳を率ゐて南ドイツに侵入し、連戦連勝の勢を以てオーストリアの國都ウィーンに迫る。オーストリア勢屈して八月プラীগに和議を結び以て戦争終る。

3 プラীগ條約 要旨左の如し。

(一) オーストリアはシウレスウイヒ、ホルスタインに關する一切の權利をプロシアに讓ること。(二) ドイツ聯邦を解散し、新たに北ドイツ聯邦を組織し、プロシア其盟主となること。(三) プロシアは償金としてオーストリアより二千萬ターレルを得ること。(四) イタリアはオーストリアよりベネチアを割取すること。

二四、プロシア、フランス戰役

1 ナポレオン三世の外交失敗 フランスは從來オーストリアに

對して敵意を挟み權力平衡を忘れざりしが、近來プロシア俄かに勃興して勢力の隆々たるものあるを以て、大に之を嫉視する折柄ナポレオン三世帝はイタリア獨立戦争、メキシコ遠征に續々失敗し、漸く失墜せんとする民望を收めんとし、ホルスタイン問題の起るを好機としてプロシアの宰相ビスマルクと密約を結び以て同國を援助せしに、又々ビスマルクの巧妙なる外交に欺かれ、以て再三の失敗を重ねぬ。

2 ルクゼンブルグ問題 偶々オランダが財政窮乏の爲め其兼領

たるルクゼンブルグを賣却せんとしたりしかば、ナポレオン直ちに之が買收の交渉を開きたり。然るにビスマルクは同地を以て北ドイツ聯邦の一なりとし之に抗議を提出し、一八六七年ロンドン會議の結果は遂に同地を永久中立地となせしかば、ナポレオン又

々失敗すると共に益々プロシアを怨むこと甚し。

3 イスパニア王位繼承問題 一八六八年イスパニアに内亂起り

女王イサベタを廢して假政府を建て、ヘーヘンツォルレルン家のレオポルド親王を迎へて王位に即けんことを。ナポレオン乃ち憤慨して其プロシア王族なるを以てプロシア王に迫り以て之が中止を要求す。然るにレオポルド自ら王位候補を辭せしに依り事一旦落着せしも、ナポレオンは尙之に満足せず、更に迫りて將來の誓約を徵す。プロシア王聽かず。兩國の平和遂に破裂して一八七〇年七月フランス先づ宣戰を公布し、プロシア亦兵の動員を始む。

4 他國軍の部署 軍備の充實せるプロシアは直ちに八十五萬の大軍を動員し、之を三軍に部署して國王元帥となり、モルトケ之が參謀長として疾風迅雷フランスの國境に迫る。然るにフランス

はナポレオン元帥となり、ルブーフ參謀長として是亦三十三萬の大軍を率ゐる直ちに南部ドイツに侵入したるも、南部ドイツは既にプロシアと合同し、同盟を豫想したるオーストリア、イタリアは局外中立を宣言せしかば、ナポレオンの計畫悉く破れ、先づ忽ちにして甚しき窮境に陥りたり。

5 セダンの戰 一八七〇年八月プロシア皇太子の率ゆる第三軍先づフランスのマクマホン將軍の大軍を破り以てフランスのドイツ侵入計劃を壞しシャロンに追撃す。此間第一軍第二軍も大に敵を破りてメッツ地方に集中す。ナポレオン乃ちメッツを救はんとしてベルギー方面に逆回せしに是亦破れたりしかば、フランス軍は止むを得ず籠城す。是に於てプロシア軍はウイレルム總指揮の下に之を包圍し激烈に砲彈を集中したりしかば、ナポレオン退路

を断たれて力盡き、同年九月遂に殘兵十萬四千餘人と共にプロシ
ア王の軍門に降伏したり。

6 **パリ開城** ナポレオンの敗報パリに達するや人心大に激
昂し、直ちに帝政を廢して共和政に復し、假政府を立て、名士ガ
ンベタ専ら局に當り、以て防備に盡す。プロシヤ軍は勝に乗じて
長驅パリを籠む。既にしてフランスの籠城四ヶ月に及びしと雖
遂に敵するを得ず、一八七一年一月開城して降を請ふに至りぬ。

7 **フランクフルト條約** 是に於て兩國はベルサイユに假條約を
結び、五月フランクフルトに於て本條約を締結し以て戰役終局を
告ぐ。即ち左の如し。

- (一) フランスはエルザス、ロートリンゲン二州を割讓すること
- (二) 償金五十億フランを向ふ三ヶ年間に支拂ふこと。(三) フ

ランスが償金を完納するに至る迄プロシヤ軍三萬はパリに駐在
すること。

二五、ドイツ帝國とフランス共和國

1 **ドイツの統一完成** プロシヤ、フランス戰爭中、ベルサイユ
のドイツ軍大本營に於て、ドイツ南北の統一を再び聯邦組織の議
各君主宰相の間に熟すると共に、一八七一年一月遂にプロシヤ王
ウイルヘルム一世を其盟王に戴き、之と同時にドイツ皇帝の位に即
かしむ。次で同年三月にはベルリンに聯邦大會議を開き、以てド
イツ憲法を制定發布し、ドイツの統一成ると共にプロシヤ遂に素
志を貫き、ドイツ帝國再興するに至れり。

2 **フランス共和國の確立** フランスは大敗後、完全に共和政を
布き、チエール大統領となりて熱心戰後の經營に従事し、治績大

に見るべきものありしも、國內の不平黨に反抗せられて職を辭せしかば、將軍マクマホン之に代り、同時に新憲法を制定し、共和政治初めて確立す。

第三章 最近時代

二六、ロシアとバルガン半島

1 ロシアの情勢 クリム戰役後ロシアはアレクサンデル二世即位して深く自國の失敗を嘆き、銳意内政の改革につとめ、宗教言語の統一を計り、外には一八七三年ヒバの半を略し、つぎてカスピ海岸の地を略し更に其東部を蠶食せる等國勢日に進揚し、勢力は隱然としてトルコを壓し、以て多年の素志たるバルガン半島の統一を期せり。

2 トルコ的情勢 ロシアに反してトルコは皇帝アブズル、アッ

ズ専ら奢侈逸樂を事として國勢を顧みず、綱紀は弛みて民心日に離叛し、内亂四方に起る等、形勢日に非にして怨嗟の聲隨處に起りたり。

二七、ロシア、トルコの戰役

1 原因

イ、トルコの内亂 トルコの紊亂日に甚しき折柄、一八七五年ボスニア、ヘルツェゴビナの二州民、租税の過重と饑饉との爲め、モンテネグロ、セルビアの後援を得て遂に叛を起したり。是に於てロシア、オーストリア、ドイツ等はイギリス、フランス、イタリア等に協議して叛亂鎮定、内政の改革をトルコ帝に迫らんとせしも、イギリス之に加入せざりしかば叛亂依然として鎮定せず。

ロ、領事虐殺事件

同年又々サロニキ港の回教徒暴動を起してドイツ、フランスの領事を殺害す、二國乃ち軍艦を派して其無法を詰り國際關係日に切ならんとす。

ハ、ブルガリア人虐殺

一八七六年、トルコはロシアの南侵に備へんと欲し、無頼の韃靼人を其北邊に移したりしを以て大に暴威を振ひブルガリア人を苦しむ。是に於てブルガリア人之に反抗して一揆を起したりしかば、トルコ政府直ちに兵を出して之を壓伏し、甚しき虐殺を恣にする等其慘狀目も當てられず。列強是に於て斷然トルコの專政を迫るに至れり。

2

戰役 此時ロシアは機正に熟せりとなし、列強に先つて大にトルコ政府に迫る所ありしも聽かれず、遂にトルコに對して宣戰を布告し、一八七七年四月ニコラ太公十二萬の兵を率ゐて進み、

先づドナウに於てトルコ艦隊を破り、進んでシブカの堅壘を陥れ遂にプレブナの要塞を圍む。トルコの名將オスマン、バシア能く防ぎ、籠城六ヶ月に亘りしと雖、食盡き兵疲るゝに至り遂に開城して降を請ひしかば、ロシア軍直ちに長驅アドリアノブルを陥れ將にコンスタンチノブルを衝かんとせり。トルコ政府大に恐れ、急をイギリスに告げて調停仲裁を求めしもロシアは他國の干涉を欲せず、トルコ乃ち一八七八年三月を以てサンステファノに和議を結びたり。

3

サンステファノ條約

左の如し。

(一) トルコはモンテネグロ、セルビア、ロマニアの獨立を承認すること。(二) ブルガリアの領域を大に擴張し、ロシアの保護下に在て自治制を布くこと。(三) トルコはロシアに對し、ア

ルメニアの大部分とドナウ河畔の地を割譲し、尙償金一千萬ルーブルを支拂ふこと。

二八、ベルリン會議

1 イギリスの抗議 サンステファアノ條約成立の報傳はるや、イギリスは利害關係上極力之に反抗を試み、オーストリアと結びてロシアに戦を挑み、風雲頗る急ならんとせり。

2 ベルリン會議 時にドイツの宰相ビスマルク之を憂ひ、遂に居中斡旋して一八七八年六月列國會議をベルリンに開き、自ら其議長となりて激論數日に亘りしが、ロシア遂に抗する能はず、大讓歩をなしてサンステファアの條約を破棄し、更めて左の條約を結び以て事平ぎたり。

(一) モンテネグロ、セルビア、羅馬ニアの獨立を承認するこ

と。(二) ブルガリアを縮少してトルコ監督の下に置き以て其自治を許すこと。(三) トルコはテッサリアをギリシアに、キプロス島をイギリスに割譲すること。(四) ロシアは小アジアのベッサム、カルス、アルダハン等を得ること。(五) オーストリアはポスニア及びヘルツェゴビナを割取すること。

二九、三帝同盟と三國同盟

1 三帝同盟 プロシアはフランスとの戦役後ドイツの統一を大成したるも、他の列強と同盟して尙フランスを孤立の位置に立たしめんと欲し、宰相ビスマルクの斡旋に依てオーストリア、ロシアの両帝と同盟を結びたり。之を三帝同盟といふ。

2 三國同盟 三帝同盟成立後、ロシアはベルリン會議に於ける他の二國が已れを援助せざりしを怨むこと甚しく、幸ひにフラン

スがドイツに對する報復の念盛んなるを認め、之と結びてドイツに寇せんとす。爛眼なるビスマルクは早くも之を看破し、一八七九年更にオーストリアと鞏固なる秘密防禦同盟を結び、尙イタリヤが法王の復仇を恐るゝと、フランスがチユニス占領後、フランスに對する感情を害しつゝあるに乘じ、巧みに之を勸めて遂に三國同盟に加入せしむ。之を三國同盟といふ。時に一八八三年。

三〇、二國同盟

三國同盟の成立を告ぐるや、フランスも當時國政を整理し、財政内政共に大成功を收めつゝありしと雖、歐洲勢力の對抗上、外交孤立の位置を脱せんため、ロシアが幸ひに三國同盟と反目しつゝあるに乘じ、兩國の政體が極端なる差異あるにも拘らず、遂に一八九六年を以て兩國の同盟條約を締結せり。

三一、ギリシア、トルコ戰役

1 原因

地中海にあるクレテ島は久しくトルコに屬して其壓制を被むること甚しかりしかば、一八八五年以來屢々叛亂を企て以て獨立せんとするに至れり。是に於て一八九五年トルコ政府は兵を送りて叛徒を平げたるのみならず、キリスト教徒を迫害すること甚し。列強乃ち大に抗議を提出したれども、トルコは曠日彌久、徒らに言を左右に托して之に従はざりき。時にクレテ島民はギリシアに内屬せんとしたるも、列國干涉して之を許さず、ギリシア乃ち此機に乘じて北方のエピロス略取せんとし、口をトルコの慘酷に藉り、一八九六年遂にトルコに宣戰を布告し、兩國爰に兵を交ふ。

2 戰役

然るにギリシア軍反りて大敗し、連戰連敗の餘、終に

和を求むるに至れり。

3 結果 是に於てギリシアはトルコに對し、テッサリアを割讓して、償金二千萬弗を支拂ひしかば、同國の財政極めて困難に陥り、爾後遂に列國が其財政權を管理することゝなり、殆んど獨立の體面を失はんとするに至れり。

三三、エジプト問題

1 スエズ運河開鑿 エジプトは一八四九年メヘマツト、アリの孫サイド、其王位に即き、フランス人レセツプスの經營に基き、スエズ運河の開鑿を企て、弟イスマイル王の世に至り、殆んど十年の長歲月を経たる、一八六九年を以て其工を終り、開通式を擧ぐるに至れり。

2 獨立と財政困難 是に於て一八七三年先づトルコ政府に獻金

して獨立の地位を得、尙進んで海陸軍の擴張其他の經營に従事せしため、財政漸く困難となり、一八七五年の頃には國債積んで十億圓に上れり。

3 英佛の財政管理 是に於て折角開鑿したる運河會社の株券十七萬餘をイギリスに賣却し、以て一時の急を救ひしと雖、其後益々困難に陥りしかば、債主たるイギリスの宰相ビーコンスファイルド伯は好機乘すべしとなし、自國の勢力を扶植せんがため、同じく債主たるフランスと協力して遂に同國の財政を管理し、以て整理の局に當ることゝなれり。

4 アラビバシア 時にエジプトの志士アラビ、バシア大に之を憤慨して、一八八一年兵を擧げ、外國人を虐殺して王に迫り、以て新政府を組織せしめしかば、イギリス大に怒り、フランスが極

東事件に出兵して亦エジプトを顧る隙なきに乘じ、獨力兵を送りて亂を平げ、遂に同國の財産管理權を獨占せり。是よりエジプトは事實上イギリスの保護國となれり。

三三、列強とアフリカ經畧

- 1 フランス ルイ、フィリポの代に於て己にアルジェリアを占領せしが、其後イギリスがキプロス島を占領するに及び、其地中海に於ける勢力を奪はれんことを恐れ、一八八一年ドイツの斡旋により、イタリアの不平を顧みずして遂にチウニスを占領したり
- 2 フアンシオダ事件 フランスは其後一八九五年にマダカスカル島を保護國とし、尋でアフリカ大陸横斷策を實行せんとし、フランス領ソマリとコンゴとの連絡を試み、一八九八年には上流のフアンシオダを占領せしが、イギリスの抗議を受くるに至り己むなく

兵を撤したり。

- 3 イギリスと南阿 アフリカ南端に於けるケープ殖民地はもとオランダ人の創設に係るものなるが、一八一四年イギリス之を購買せしより、其殖民にしてイギリス治下に居るを屑しとせざる者續々相率ゐて北方に移住し、遂にトランスバール、オランジウの二共和國を建設せしかば、イギリス亦已むを得ずして其獨立を承認せり。

4 イギリスの南阿戰役

イ、原因 其後此二國地方に於て金剛石鑛續々發見せらるゝこと共にイギリス人の移住する者漸く増加す。然るに兩國は毫も是等に參政權を與へず、且つ過重の租税を賦課せしかば、イギリスは斷乎として參政權の分與を強請す。然れども兩國之を拒絶

したるを以て、遂にイギリスは宣戦を布告してトランスバールに出兵を見るに至れり。

ロ、トランスバール滅亡 一八九九年イギリス兵をトランスバールに出すや、同國の人民は協同して大統領クリウーゲル指揮の下に屢々奇計を用ゐてイギリス軍を悩ませしも、終に衆寡敵せずして粉碎せられ、一九〇二年全く滅亡してイギリス領に編入せらる。然れども此役やイギリスの強大を以て、しかも二十萬の大兵を送りたるに拘らず、クリウーゲル善く少兵を以て之を防ぎ、長日月の日子を費さしめたるは、亡びて尙餘榮ありと云ふべし。

5 イギリスの政策 イギリス、トランスバールを併するや、同國の殖民大臣チエンバーレンの唱道したる南阿統一の政策是に於

て効を奏し、爾來着々奏功するに至りぬ。

6 列國の領土 イギリスの奏功すると共に、列國また夫れ々々領土を造るに怠らず、ドイツの西南アフリカ、東部アフリカに於ける、其他イタリア、ポルトガル、ベルギー等また諸所に小領土を有するに至りぬ。

三四、北アメリカ合衆國と米西戦争

1 國は一變 北アメリカ合衆國は十九世紀の初期にモンロー主義を標榜したる以來、歐洲列國が未開地分割、勢力均衡に日も是れ足らざる忙殺裡に在りても、獨り商業を立國の政策とし、累世其政策を襲用し來りしが、同世紀の末葉に至り、國力充實すると共に、世界の趨勢に鑑みる所あり、茲に其國是を一變して帝國主義を執り、只管軍備の擴張と領土の擴張を企圖するに至りぬ。

2

ハワイ合併 一八九三年太平洋上の群島ハワイ王國に革命起り、女王リリオカラニ廢せられて共和政治を布くや、時のアメリカ合衆國大統領マツキンレーは先づ第一に國是を應用し之に干渉し、以て合併し終りたり。時に一八九八年。

3

米西戦争 一八九五年イスパニアの屬島たるキューバに叛亂起り、久しく鎮定せざりしかば、マツキンレー再び干渉して遂にイスパニアと戰端を開くに至りぬ。是に於て合衆國はキューバ及び南洋のフィリピンにイスパニアの海陸軍を粉碎したりしかば、遂にパリーの和議と成り、キウーバは獨立して、西印度諸島及びフィリピン群島はイスパニアよりアメリカ合衆國に割讓するに至りぬ。

三五、

萬國平和會議の開設

一八九九年七月、ロシア皇帝ニコラス二世の主唱に依り萬國平和會議をオランダの國都ヘーグ市に開く。世界の列國は乃ち各代表者を參列せしめて議する所ありしが、徒らに空論理想に終り、遂に其目的を達すること能はず、後ち第二回會議を開きしも亦要領を得ず。各國は汲々として軍備の擴張に力め、以て自衛と勢力權衡、侵畧に具へつゝあり。

三六、

無政府社會黨の跋扈

十九世紀の中葉以來各國の統一基礎成りて、帝國主義の確立を見るや、一種の社會黨、無政府黨大に起り、殖産興業の隆盛と共に政界の一大勢力を爲し、ドイツ、フランスの如きさへ其調和に苦心する程なるが、ロシア最甚しく、一八七八年には虚無黨なるもの新たに結黨式を擧げ、爾來専ら秩序の破壊と帝王の虐殺に力め、皇帝は俟

數々此奇禍にかゝれり。

三七、列強の現状趨勢

1 イギリス イギリスは女皇ビクトリア即位すると共に航海條例、穀物令を廢止し、選舉法を改正して憲政の圓滿を計り、アイランド問題を解決して、國務駸々と進歩し、加之殖民政策着々成功して盛大を極め、其領土は東洋より南洋其他に及び、世界第一の大版圖を領有して、海軍の強盛また世界に冠たり。即ち東洋に於てはインドの經營に全力を注ぎ、遂に全國を領土に移してより、南洋に於けるオーストラリアの殖民策成功し自治制を許して監督保護權を確保し、日本と同盟を結びて東洋に於ける位置を留保する等、頗る苦心の狀顯はる。斯くて一九〇一年女王歿して現帝エドワード七世即位するに至りぬ。

2

ドイツ プロシヤは現帝ウイルヘルム二世即位以後、多藝多能を以て名あり、あらゆる方面に活躍を試みつゝあるが故に、未だ他列強の如く領土擴大ならざりと雖、ドイツの國威は駸々として進歩し、將にイギリスの壘を磨さんとするの勢を呈するに至れり而して近來漸く東洋の現状に着目を怠らず、日清戰役にはロシア等と共に日本に干渉を試み、遂に清國の膠州灣を租借し、同國內の鐵道布設權を獲得する等、益々飛躍を示しつゝあり。

3

フランス フランスは大統領ファウル、ルーベールの下に益々ロシアとの親密を加へ、軍備を充實して今や其一二を歐洲に争はんとし、文藝科學また頗る見るべきものあり。而して東洋に於ける活躍も決して他國に落ちず、其後インドの經營は實に同國の生命にして、清國々境に逼迫するの策を怠らず、廣州灣を租借する

等大に注目し値するものあり。然れどもロシアと同盟國たるが故に、一時日清戦後我が國に干渉を試みたりとはいへ、其後日露戦役に於て我れの大捷に歸するや、漸く其愚を悟り、爾來我と協約を結びて東洋の領地を留保せしめ、其多大豊富なる資本は漸く我國に放下せられんとするの傾向を呈せり。

4 ロシア　ロシアは一八九四年現帝ニコラ二世即位以來殖産工業を奨むると共に、暫らくバルガン半島を怠りて専心極東經營に熱中し、其東方侵略とシベリア經營は實に帝が生命と稱するも過言に非ざるべし。されば、其主義も着々成功してシベリアの經營今や完成せんとして清國の領土日に蹙み、一八三九年よりは中央アジアの地亦其侵畧併有に歸し、ペルシアの疲弊に乗じて陰然勢力を振ひ、尙イギリスインド經營に垂涎してアフガニスタン、ペ

ルチスタンの地を籠絡せんとし、端なくもイギリスの嫉視を買ひ爾來兩國間に激烈なる衝突を起し、風雲頗る暗澹たりしも、一八九五年漸く協商成立して僅かに事なきを得たり。然れども、極東即ち滿洲地方に於ける野心は、一時我が國を威嚇して之を左右せしと雖、遂に一九〇四年日露の戦役を醸成し、其結果は從來隆々たる勢力も一戦にして頓挫を來し、大に威信を失墜したると同時に、本國は内亂紛起し、天變地異と共に已むなく多年の專制主義を抛ち、漸く憲法の發布を見るに至りしかど、尙列強の如き完備のものに非ず、今や内憂外患踵を接して來らんとしつゝある、多忙の時期に際會せり。

5 北米合衆國　北アメリカ合衆國は版圖の廣大と富源の豊裕と國民の溢るゝが如き活氣とは、次第に大なる發展を遂げ、殊に大

統領ルーズベルト出で、奮闘的政治家の好摸範を示し、銳意自國の優勢保持に努め、極東の政治問題より太平洋の覇權掌握に就ては最注目を怠らず、支那の門戶開放を主張して日露戰役には其怪腕を振ひ、以て居中調停の勞を執りし等、今や世界に優勢を握るの域に達しつゝあり。而してタフト次いで大統領となり、氏の政策を繼ぎて現今盛んに活動を續く。

6 三國同盟の現状

ビスマルクの政策に依りて締結せられたる彼の三國同盟は、其後ドイツ皇帝ウイルヘルム一世歿してビスマルク引退すると共に其盟主首領を失ひ、亦舊時の鞏固を見ず、ドイツは漸くロシアとフランス間に孤立せんとするの有様にあり。

7 オーストリア

オーストリアはハンガリア其他異人種各地の統一に困み、國力亦昔時の偉觀を失ひ、ハンガリア將に獨立せん

とするの勢を呈しつゝあり。

8 イタリア

イタリア亦統一以來過度に軍備を擴張したる爲め財政紊亂して國力漸く萎靡せんとし、近來は資本豊富なるフランスに秋波を送りて漸次同國と接近するの兆を呈し、三國同盟全く瓦解して實なきに至れり。而して歐洲列強中最初に我國へ好意を表したるも此國にして、爾來双互の國際關係は親密なる状態にあり。

9 英佛協商

此時に當り、イギリス皇帝は從來の態度を抛ちてパリにフランス大統領を訪問し、遂に鞏固なる兩國の協商を結び、以て國際關係の紛議を絶ちたり。實に兩國が握手は絶えて久しき現象なりとす。

三八、世界に於ける日本の位置

從來東洋諸國の消息は世界の文明に關せずとなし、萬國史上殆んど忘却せられつゝありしに、今や東西洋の關係は頗る密接となり、到底離るべからざる關係を結びたると共に、輓近我が國の進歩は戰術の長技を列國に認められしかば、列強の間に伍するを得て多難多望文明史上戰史上閑却する能はざるのみならず、現に世界の一大勢力として一舉一動は直ちに歐洲の平和を攪動するに足るものあり。況んや世界の形勢たる須臾も靜止を許さずして、一日進歩せざれば則ち一日の退歩を致すとき、我國人たる者須く古今の成敗東西の形勢に鑑みて自ら奮勵努力せざるべからず。

第四章 第十九世紀文明史

三九、學藝の進歩

第十八世紀の末葉より第十九世紀に至る百餘年間に於ける社會の進

歩は實に驚くべきものあり。其原因する所は實に學術の進歩にして特に各科の純正科學に新説發明續出し、其應用の最盛んなりしに因るものなり。

四〇、文藝

1 哲學 學術の淵藪とも稱せらるゝはドイツにして、特に哲學

の如き他國に擢んで、盛んに研究せられ、近世哲學の泰斗とも稱せらるゝカントはドイツに出で、一世を啓發し、其後フイヒテ、シエリング、ヘーゲル、ハルトマン、シオンペンハウエル相次いで同國に現はれ、ミル、スペンサーはイギリスに、コントはフランスに各輩出して各一家の説を唱へたるものなり。

2 史學 文藝科學の進歩に伴ふて史學の研究亦頗る盛んとなれり。就中ドイツ最盛にして、一八二〇年代にニールブル出で、ロー

マ史に一新生面を開き、尋で同じくランケ現はれて爛々たる史眼と深刻なる研究とを以て更に一層の光輝を發揚し、以て世界史學の泰斗と仰がれたり。是に於てドイツはジーベル、パウムガルデン、トライチウチ、モムゼン、イギリスはフリーマン、ガーチナ、フランスはテリスの如き知名の史學者輩出するに至れり。

3

詩文

先づドイツにはゲーテ、シルレルの兩明星歿してより、ホフマン、クライスト、ハイネ、ハウプトマンの諸文豪出で、ドイツ文學を隆んにし、イギリスにはミルトン以後の詩仙と仰がる、バイロン出で、スコット、テニソン、アルノルド之に次ぎ、ヂッケンスとサツケレーの小説は其名高く、カーライルとマコーレは共に評論家として立ち、何れも十九世紀イギリス文學をして他國に擡んでしめ、フランス亦シアートブリアン、ラマルチーヌ

出で、新文學の勃興を促せしより、ユーゴー、ゴーチエ、ヂウマ、ゾラ等の如き諸文豪輩出し、以てフランス文學を燦然たらしめたり。其他ロシアのトルストイ、ノルウエーのイブセン、アメリカ合衆國の詩人ロングフェロー、エマルソン、同文人アービン等何れも當世の珍なりとす。

4 美術音楽

美術に於ては繪畫に専ら擬古風行はれ、就中フランス最盛んにして、ダヒード、ジロデエ、ジエリコール等出で、風景畫の名家としてはコロ、ヂウブレ、ルソー、ミレー等輩出し、其他理想家、寫實家等數多あり。彫刻界亦名手を出し、フランスイタリア最隆盛を極めしも、後世理想的彫刻の作家として其名を喧傳せられしはドイツの大彫刻家トルワルドセンの右に出づるものなし。而して音楽家にはドイツのベートーフェン最著名なり

四一、科學

とす。

1 其進歩

十九世紀に於ける長足の進歩は實に驚くべきものにして、文明の淵源は茲にありとす。即ち天文、數理、物理、化學、博物等何れも研究を重ねられたる結果大發達を遂げしものにて、就中ドイツ人マイエルの勢力不滅説と、イギリス人ダーウインの進化論とは近世科學界の二大發明として知らる。

2 科學の應用

斯の如く科學の進歩するに隨ひ、これが應用の結果は遂に社會の生活を一新し、智識を進め、利益を増し、のみならず、生存競争に偉大なる勢力を造りて以て重大の影響を與へ之がため幾多の戦争、幾多の條約をして殆んど顔色なからしむるに至り、尙ほ駭々として其研究、應用、進歩、發明の手は緩めら

れず。

3 蒸氣機關

科學の應用中最も重なるものを蒸氣力と電氣力の二となす。即ち蒸氣力を初めて器械に應用せるはイギリス人ワットにして、實に一七六九年なりしが、之を更に實用に供したるは一八〇七年アメリカ人フルトンが汽船を造れると、一八一二年イギリス人スチブソンが汽車を製造したるにありき。而して之の三大發明は實に十九世紀文明の花と稱せらる。

4 電氣力

電氣力を初めて應用せるはアメリカ人モールズにして、實に一八三七年電信機となりたるものなるが、其後一八七二年以後スコットランド人ベルの電話機發明となり、次で電燈、電車、無線電信等と種々應用せられたるものにして、蒸氣機關と共に二大發明と稱せらる。

5 醫術 科學の進歩は勢ひを驅つて醫術をも一新するに至りぬ其特に顯著なるは、接種注射の發明にして、回生救民の天使と稱せらる。

6 兵器 斯の如く幾多人類に効益を與へたる科學の應用は、生存競争上の必要に迫られて更に武器兵器の新發明となり、以て悲惨なる程度を益々増大しつゝあり。即ち爆裂彈、無煙火藥等の如し。

四二、社會の風潮

1 社會主義 科學の進歩と共に益々生存競争の激烈を現し、富力は實に昔日に千萬倍すると雖、随つて多數の小民また生じ、日々それが窮乏を訴ふるの聲各國に喧し。是に於て社會主義起り、貧富の平均、資本主壓制の聲益々大にして、各國亦是が救濟法に苦

心し、或は保護法、給養法、養老院、育兒院等種々の形式にして顯るゝに至れり。之を國家社會主義制度といふ。

2 赤十字社 斯の如く種々の形式に依て博愛事業勃興すると共に、萬國同歸、四海兄弟たるの實を擧げんとして赤十字社起りたり。即ち曩きにナイチンゲール嬢が一度び其濫腸を作るや、其後スウイス人ヂウナン形式に於て之が必要を認め、遂に社會の仁人義士に訴へ、以て萬國赤十字同盟なるものを起すに至れり。

普通學研究會著

研究の好侶伴

續讀閱覽至便

受驗準備叢書

寸珍形
正價各冊 金拾貳錢
郵稅各冊 金四錢

中學校、師範學校、高等女學校其他一般中等程度諸學校に在學せらるる學生諸君、日常研學の復究の好師友として、將た好侶伴として、且つは進んで高等諸學校に入學せんとし、將た各種競争試験に應せんとする諸君が受驗準備用寶典として、茲に學生研究叢書の刊行成る。而して各書は編纂の統一と各科連絡を保たんが爲め其叙述は擧げて之を普通學研究會に委託せり。同會が多年の經驗と苦心の操練は世の夙に知る處、故に其内容や要を摘みて煩を避け、冗を省きて精を蒐め、一覽の下に研究準備の良願た問るを得ること爰に贅するの限りにあらず。請ふ瓦礫と同視すること勿れ。

▼既刊書目▲

◎最新日本歴史

全二冊

◎最新東洋歴史

全一冊

◎最新西洋歴史

全二冊

◎最新日本地理

全一冊

▼近刊書目▲

◎最新外國地理

全二冊

◎最新英文

全一冊

◎最新日本文典

全一冊

◎最新物理學

全二冊

◎最新化學

全二冊

◎最新地文

全一冊

◎最新動物學

全一冊

◎最新植物學

全一冊

◎最新礦物學

全一冊

◎最新生理及衛生

全一冊

◎最新算術

全一冊

◎最新代數

全二冊

◎最新幾何學

全二冊

◎最新三角法

全一冊

2750

明治四十三年三月十八日印刷
明治四十三年三月二十三日發行

正價拾五錢

普通學研究會著

大阪市南區安堂寺橋通四丁目一〇九番邸

發行者 井上尙一

東京市麴町區飯田町貳丁目四〇番地

發行者 井上鐵次郎

大阪市西區本田町通二丁目四七ノ二

印刷者 日出版民助



不許複製

東京市麴町區飯田町貳丁目

井上一

大阪市南區安堂寺町四

書堂

振替貯金口座
東京一九八〇九

振替貯金口座
大阪三四九四

發行所